

# 追手門学院大学

## WIL推進センター年報

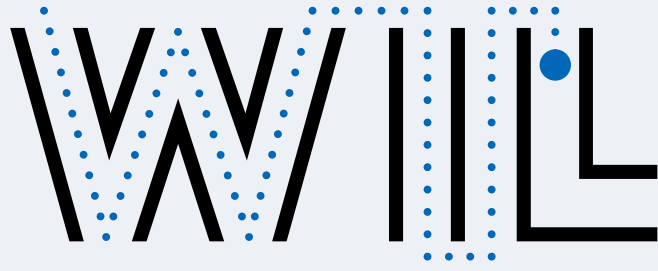
### 第4号

(2025)



# 目次

はじめに	1
第1章 WILとは(担当編集:大串 恵太)	2
1-1. WILの概要	3
1-2. 社会背景	3
1-3. WILの3要素と4条件	4
1-4. WILの広がり:正課科目・課外活動	4
1-5. 大学改革の一環としてのWIL	5
1-6. 計画事業の現在までの動向	5
第2章 WIL正課科目(担当編集:大串 恵太・太田 昌志)	7
2-1. WIL正課科目の概要	8
2-2. WIL正課科目の事例	
歴史的建造物への理解を実地見学とグループ発表から深める	9
授業内外の発信の場を通じて、英語スキルを向上する	10
大阪の農産物PRを多方面から進める	11
出張!健幸くらし応援隊	12
第3章 WIL課外プログラム(担当編集:大串 恵太・太田 昌志)	13
3-1. WIL課外プログラムの概要	14
3-2. 追大WIL課外活動の事例	
CO <sub>2</sub> ゼロチャレンジ~学園祭の二酸化炭素を減らそう~	15
追大ハーベスト	16
テイキングヘルプデスク	17
シニア万博	18
若狭地方の魅力発信と新たなニーズのマーケット調査、若狭ブランドの確立	19
バーチャルOIDAIプロジェクト	20
VR×国際交流プロジェクト	21
追手門ロボットチャレンジプロジェクト	22
茨木×小豆島コラボプロジェクト	23
追大WILチャレンジによる支援期間終了後の取り組み	24
第4章 インターンシップ制度(担当編集:伊藤 文男)	25
4-1. インターンシップとは	26
4-2. インターンシップの実施状況	27
4-3. 就業体験のタイプ	29
4-4. 就業体験の流れ	30
4-5. 事前・事後研修の実施	32
4-6. 就業体験の応募方法の種類	33
4-7. 就業体験の単位認定について	33
4-8. 就業体験の実績	34
4-9. 追大実践型就業体験事例	
追手門学院大学WIL推進センター	35
株式会社ガンバ大阪	36
株式会社サカイ引越センター	37
第5章 成果(担当編集:太田 昌志・大串 恵太)	38
5-1. WIL AWARDS	39
5-2. WILに関する広報実績	40
5-3. WILに関する表彰事例	41
5-4. WILによる学修成果の可視化	42
5-5. WIL推進センターの新しい取り組み①	
大学版社会見学プログラム 社会の表舞台を支える裏部隊の人々	43
5-6. WIL推進センターの新しい取り組み②	
2025年度「新入生向けWILオリエンテーション」	44
第6章 資料編	46
編集後記	56



WIL

行動して学び、学びながら行動する



グローバル化やデジタル化、AIをはじめとするさまざまな技術の融合により、社会は目まぐるしく変化し、より複雑化・高度化しています。変化のスピードが加速し続け、予測が困難な状況下では、主体的に行動して自ら課題を発見し、その解決に必要な知識や技術・能力を獲得しながら、課題に立ち向かい続ける必要があります。

WIL (Work-Is-Learning) は、主体的に学び、協働して問題解決にあたる追手門学院大学独自の学修スタイル。

行動(Work)を通じて学修(Learning)を行い、それを即実践に反映する経験を蓄積することで、予測困難な状況の中でも行動し、学び続ける力を養います。

「WILの3要素」

多様な人々と手を携え、知恵を出し合い、議論を尽くして、答えのない問いに対する最適解を導きだすことに挑みます。



教育理念で謳う「社会有為」は世のため人のために誠意を持って尽くすということです。これまでの社会を踏まえつつ、今の社会とこれからの社会における答えのない問いに挑みます。

教室を出て、世代を超え、地域を超えて、既成概念を超えて発信することに挑みます。



「追大WILチャレンジ」

学生のみさんの自由な発想から生まれる社会有為性の高い正課外活動を後押しする追大独自の仕組みです。追大WILの「社会有為(社会のためになる)」「協働性(他者と協力して取り組む)」「発信性(外部への公表・発表の機会がある)」の3要素を満たす内容で、1プロジェクト5人以上の取り組みであることなどを条件に、1プロジェクトに対して最大40万円の活動費用を補助します。詳しくは年に数回開催される説明会へ！

・プロジェクト開始までのおおまかな流れ

- 説明会参加, 企画書・申請書を提出, 企画内容の審査



学内外に広がる  
追大生の  
チャレンジ!

## 01

case  
学園祭から  
取り組む脱炭素

### CO<sub>2</sub>ゼロチャレンジ ～学園祭の二酸化炭素を減らそう～



学園祭のカーボンオフセットを目指し、太陽光発電による模擬店運営やエコ容器導入を実践。クイズ展示や交通手段調査も行い、排出量の算定・相殺を通じて脱炭素を啓発した。

WIL Challenge

## 02

case  
のべ500人以上の  
子どもと交流

### 追大ハーベスト



野菜の栽培過程や収穫を体験する機会を地域の子どものために提供し、子どもたちの「食」や「自然」への関心を育むことを目的とした活動。地域の学校や子ども会などへの訪問もおこなった。

WIL Challenge

教員・職員・学生の  
コラボレーションも  
追大WIL!

## 06

case  
大学を体感できる  
仮想空間をつくる

### バーチャルOIDAI プロジェクト



Unityを用いて仮想空間に総持寺キャンパスを構築。VRゴーグルによる見学体験を通じ、高校生や地域住民へ大学と地域の魅力を発信した。

WIL Collabo

## 03

case

誰もが学びやすい  
キャンパスへ。  
学生がつくる聴覚障害支援  
テイキング  
ヘルプデスク



聴覚障害学生の修学支援体制の構築を目指し、他大学や福祉施設を調査。音声認識ソフトと学生によるリアルタイム修正を組み合わせた支援手法を確立し、運用マニュアルを作成して大学に提案した。

WIL Challenge

## 04

case

スマホ教室と万博を契機に、  
地域の高齢者との交流を深める

### シニア万博



茨木市の高齢者と連携し、スマホ教室と万博同行支援を実施。ID取得から当日の安全管理まで学生が伴走した。デジタル格差の解消を通じ、地域に密着した継続的な協力関係を築いた。

WIL Challenge

## 05

case

若狭と大阪を食で結ぶ！  
高校生との共同開発

### 若狭地方の魅力発信と 新たなニーズの マーケット調査、 若狭ブランドの確立



民宿経営者や高校生と連携し、若狭の特産品をPR。地元高校生と「若狭焼き」を共同開発し、学園祭で販売した。アンケート調査からは観光の課題を明らかにした。

WIL Challenge

## 07

case

Let's enjoy  
world tour in VR.

### VR×国際交流 プロジェクト



留学生の出身5カ国を題材に、VRコンテンツを制作。高校や万博会場等でワークショップを開催し、現地の映像と解説で異文化体験を提供した。

WIL Collabo

## 08

case

子どもたちのSTEAM教育を  
学生が支援する

### 追手門 ロボットチャレンジ プロジェクト



プログラミングによるロボット制御を軸としたSTEAM講座を運営。関西万博「クラゲ館」での実践や地域交流を通じ、子どもたちが技術と社会課題を学ぶ機会を提供した。

WIL Collabo

## 09

case

地域間の新しい交流を  
生み出す！

### 茨木×小豆島 コラボプロジェクト



姉妹都市である両地域の地域活性化を目指し、特産品によるコラボ食品企画や子どもたちの交流イベントに取り組む。食やデジタルを通じた多世代交流、農業祭でのブース運営など多角的な活動を展開した。

WIL Collabo

正課科目にも広がる追大WIL！

各学部の専門科目を含む正課科目で展開されている追大WILプログラムは

**53科目、365クラス**  
(2025年度)

**01 文学部**  
**日本文化史1B<美建>**

伊藤洋子 特任教授

歴史的建造物への理解を実地見学とグループ発表から深める。奈良・京都の寺社を見学し、建築形態や背景思想を学んだ。専門家を招いた発表会では、学生それぞれの視点から成果を共有した。



**02 国際学部**  
**Advanced English3(資格英語演習)A**

原めぐみ 准教授

留学生との交流やワークショップを通じ、生きた英語でのコミュニケーション力を磨く。国内外での実践を通じ、英語での発信力と協働して課題を解決する力を養う。



**03 経営学部**  
**発展演習1・2(村上ゼミ)**

村上喜郁 教授

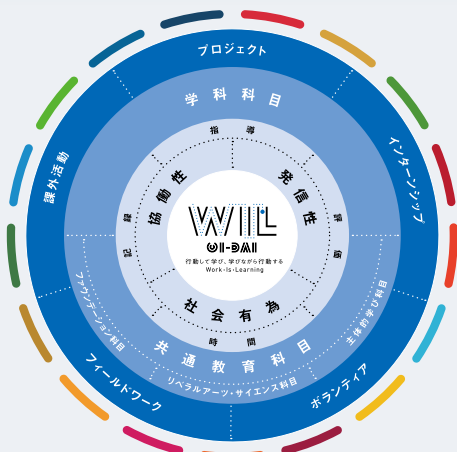
地域企業・自治体と連携し、経営学の知見を活かした実践に取り組む。大阪府との協働では、地場産物「大阪産(もん)」の動画制作や万博での発表、学園祭での調理販売など、多方面からPRした。



**04 全学部**  
**プロジェクト実践(プロジェクトタイプ)**

共通教育機構 巽樹理 准教授・社会学部 松井健 教授

高齢者を対象に、健康づくりと孤立予防を目指す出張教室を開催。参加者の声に応える企画や運営の工夫を重ねる中で、社会課題を自分ごととして捉え、行動する姿勢を身につけた。



WILプログラム参加に関心がある、何かプロジェクトを立ち上げたい、などの相談は、お気軽に

WIL推進センター窓口まで！  
担当教員がお話を伺います。

**WIL 推進センター**

窓 口：総持寺キャンパス  
Academic Ark 1階 A141

問合せ先：ccd@otemon.ac.jp

## はじめに

本年報は、設立4年目を迎えた追手門学院大学 WIL 推進センターの2025年度の活動を総括したものです。

2025年度は、WILのさらなる浸透と参加機会の拡充を目指し、制度面・広報面の両面において新たな取り組みを進めた年度となりました。

まず、単位認定型就業体験プログラムの参加者数増加を目的として、実習に向けた事前研修にあたるプログラムを「単位認定型就業体験事前講座」として独立させ、この講座の受講のみで「インターシップ実習Ⅰ」の単位を認定する仕組みに改めました。これにより、就業体験への心理的・時間的ハードルを下げ、より多くの学生が社会との接点を持つ第一歩を踏み出しやすい環境を整備しました。

また、4月の講義開始前という早いタイミングで、新入生を主な対象とした大型イベント「友だち作り&キャンパス探検隊」および「サキドリ！就活セミナー&キャンパス探検隊」を開催しました。これらの企画は、入学直後の段階から学生にWILの理念や取り組みを周知し、主体的な学びへの関心を喚起することをねらいとしたものです。結果として、多くの学生がWILという教育コンセプトやプログラムの存在を知り、具体的な取り組みや先輩学生の活動事例に触れる中で、大学生活における学びの広がりイメージする機会となりました。

加えて、昨年度に引き続き、正課外のWILプログラムの件数および参加学生数は一層の増加を見せており、学生・教職員双方におけるWILの認知度が着実に高まっていることを実感しています。単なる制度としてではなく、「何かに挑戦したい」「社会と関わる学びを実践したい」と考える学生や教職員の受け皿として、WIL推進センターが本格的に機能し始めていることを感じさせる一年でもありました。

本センターでは、引き続きこれらの取り組みを通じて、社会とのつながりの中で学生が主体的に学び、実践を通じて成長できる機会の拡充を図り、WILの理念のもとで学修の質的充実を目指してまいります。本年報が、これまでの活動を振り返るとともに、今後のさらなる発展に向けた一助となることを願っております。

今後とも変わらぬご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

2026年3月17日

共通教育機構 特任准教授  
WIL推進センター長  
大申 恵太

# 第1章 WILとは

WIL、すなわち「Work-Is-Learning」は追手門学院が独自に創った造語である。この概念は、「行動しながら学び、学びながら行動する」というコンセプトを核に、学院創立130周年を迎えた2018年の記念式典で初めて発表された。以降2019年度から、本学の新たな学修スタイルとして全学的に推進している。

本章では、WILの概要、背景、そしてその全体像について概観する。



## 1-1. WILの概要

「WIL(Work-Is-Learning)」は、追手門学院独自の造語で、主体的に学び、協働して問題解決にあたる学修スタイルであり、行動(Work)を通じて学修(Learning)を行い、同時にそれを即実践に反映する経験の蓄積を図ろうとするものである。

特に追手門学院大学では、基礎力を育成する共通教育と学部ごとの専門教育をベースにWILを展開し、「追大WIL」(OIDAI WIL)として推進している。以下(1-3)で示すWILの要件を満たせば、共通教育・専門教育に限らず、学生の自主的な活動もWILとして認定していく。社会とのつながりの中で実践的な学びを進めることで、生涯にわたって学び続ける力を育成する。

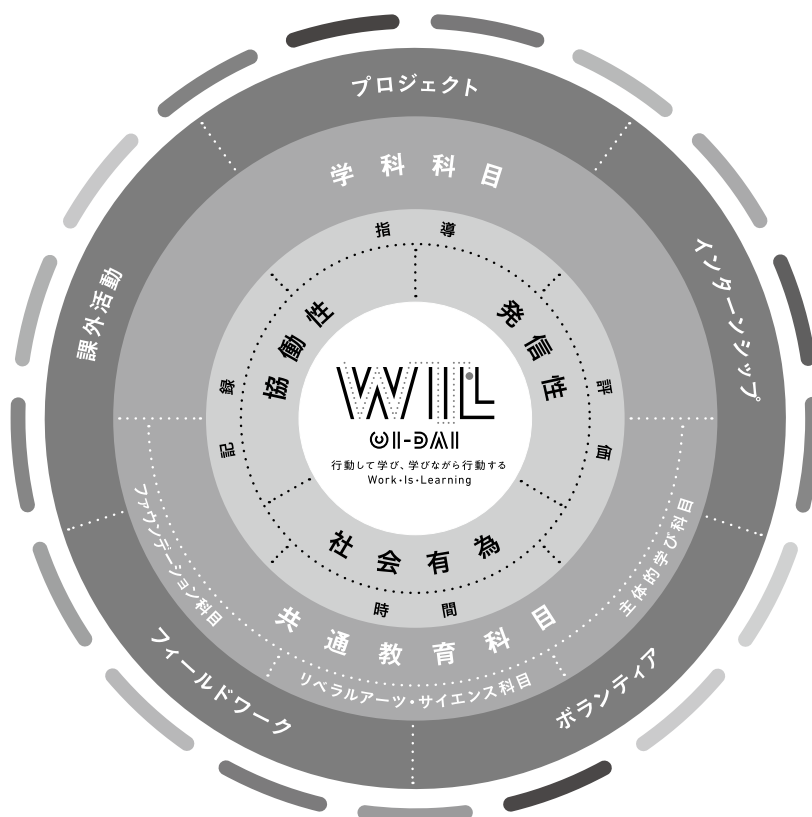


図 1-1. WIL 概念図

## 1-2. 社会背景

グローバル化やデジタル化、AIをはじめとするさまざまな技術の融合により、社会は目まぐるしく変化し、より複雑化・高度化している。変化のスピードが加速し続け、予測が困難な状況下では、主体的に行動して自ら課題を発見し、その解決に必要な知識や技術・能力を獲得しながら、課題に立ち向かい続ける必要がある。このように、行動しながら、そして行動を通じて学修を行い、それを即実践に反映する経験の蓄積こそが、次なる変化に適応し、新たな課題を乗り越える力となる。

そのため追手門学院大学では、これまでの「社会での実践に備えて、大学で学修する」という、学修と実践とを分断した知識偏重の学修モデルからいち早く脱し、「学修と実践を同時に経験し、それを繰り返す」学修スタイルに転換を図り、企業や地域、国際社会との連携のもとに、WILの学びを展開している。

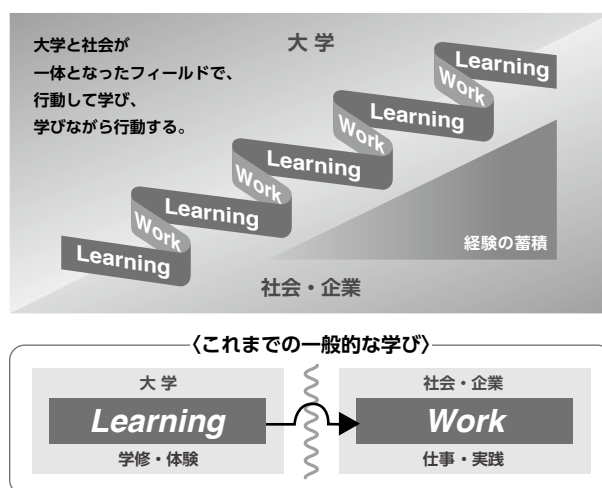


図 1-2. WIL の学び

### 1-3. WIL の 3 要素と 4 条件

追大WILは「社会有為」「協働性」「発信性」の3つの要素から構成される教育プログラムである。

#### 「社会有為」

教育理念「独立自彊・社会有為」で謳う「社会有為」は、世のため人のために誠意を持って尽くすという意味を持つ。WILは、まさにこの教育理念を具現化する取り組みである。これまでの社会を踏まえつつ、今の社会とこれからの社会における答えのない問いに立ち向かう中で学びを深めていく。

#### 「協働性」「発信性」

これからの社会は、今までも増して、他者との協働が求められる。多様な人々と手を携え、知恵を出し合い、議論を尽くして、答えのない問いに対する最適解を導き出すことに挑む。さらに、教室を出て、世代を超え、地域を超えて、既成概念を超えて発信することに挑む。

また、上記の3要素に加え、以下の4条件を満たす課外活動について、届出・申請等の手続きを経てWILとして認定している。

- ① 時間：活動時間が原則30時間以上確保されること
- ② 記録：活動日誌及び報告書等、ポートフォリオへの記録があること
- ③ 指導：教育職員又は事務職員による指導があること
- ④ 評価：アンケートやアセスメント等による評価が行われること

### 1-4. WIL の広がり：正課科目・課外活動

WILプログラムの主軸は、共通教育科目や学部の専門科目である。先にあげた「社会有為」「協働性」「発信性」の3要素を備えているものはWILとして登録され、正課科目の標準的な一モデルとなっている。学びと活動のポートフォリオを蓄積し、学修計画作り・キャリア開発につないでいく。一方、ボランティア・プロジェクトなどの、学生主体の活動もWILプログラムとして認定される。自由度の高い、様々な刺激的な学修の機会への挑戦を後押しする環境を整備し、教職員のサポートにより、「体験」を「体験」にとどめず、深い学びへと転換、定着を促進する。

## 1-5. 大学改革の一環としてのWIL

追手門学院では、2019年5月に公表した「長期構想2040」のなかで、「追手門学院教育改革宣言」として以下のように4点を掲げ、教育改革に取り組んでいる。WILの実現はここにもあげられている通り、学院全体、大学の教育改革の一環として位置付けられている。

### 追手門学院教育改革宣言

私たち追手門学院の教職員は次のとおり教育改革を行うことを宣言します。

#### 1.WIL(Work-Is-Learning)の実現

学生・生徒・児童・園児(以下、「学院生」とする)が自ら学んで行動し、行動して学ぶことを目標とし、それを実現する。

#### 2.成長の可視化

ポートフォリオによって、学院生の成長を可視化し、対話を通してキャリアの成長を支援する。

#### 3.ICT活用、未来社会対応

ICT活用教育によってAI時代に備え、主体的な学びによって社会の変化に対応する。

#### 4.教育の質保証

社会に誇ることのできる学院生になるように、教育力を高め、教育の質保証に務める。

## 1-6. 計画事業の現在までの動向

WILに関連する推進事業として計画された取り組みについて、2025年度現在までの状況は以下の通りである。

### ・WILプログラム登録数の推移

表 1-1. WIL プログラム登録数の推移

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度
正課科目(科目数)	—	57	44	48	57	49	53
正課科目(クラス数)	—	297	325	347	387	369	365
課外活動	6 <sup>*1</sup>	2 <sup>*1</sup>	6	5	7	7	10

※1 2019年度、2020年度については現在の課外活動における制度が未整備であったが、要件を満たした活動としてWIL推進プロジェクト委員会で認定したもの。

※2 学生による履修のべ数は8,803である。

・追大WIL課外活動を後押しするための予算補助制度構築

「追大WILチャレンジ(追大WILプログラム奨励金プロジェクト)」「追大WILコラボ(応募型)」といった追大WIL課外活動の制度を整備し、2021年度から運用を開始している。追大WIL課外活動の詳細については第3章で取り上げる。

表 1-2. 過去 3 年の追大 WIL チャレンジの推移

	2023 年度	2024 年度	2025 年度
活動数	4	3	5
学生数	46	54	107

表1-3. 過去3年の追大WILコラボ(応募型)の推移

	2023 年度	2024 年度	2025 年度
活動数	2	2	2
学生数	11	12	18

・評価指標の開発

2020年の評価検証プロジェクトミーティングを経て、株式会社RIASECが運営する『PROG』を学生の学習効果を測る統一ツールとして採用した。WIL登録された正課科目でのプレ・ポストアセスメントの実施を呼びかけると同時に、追大WIL課外活動についてはアセスメントを統一実施している。引き続きデータを蓄積中であり、詳細な分析は今後の課題となるが、基本的な傾向としては各項目の伸長が見られる状況となっている。

・FD

2019年度の全学FDにおいて、当時のWIL推進プロジェクト委員会副委員長である伊藤文男キャリア開発センター長がWILの概要をはじめ制度に関する説明をおこない、理解を求めるとともに推進の協力を呼びかけたことを起点に、全学教授会等でもWILに関連する事柄が度々テーマとして取り上げられている。

・WILパートナー制度

学外の有識者等に、WILに関する事業への助言やWILの協働開発、学生のサポートや広報活動への協力等の支援をいただくことを念頭に、追大WILパートナー制度を設けている。2020年度に制度が整備されて以降、2022年度までは学内パートナーの就任をもって制度運用を試行した。2023年度に規定の一部改正をおこない、2024年度から以下の方々にストラテジーパートナーへの委嘱を実施した。

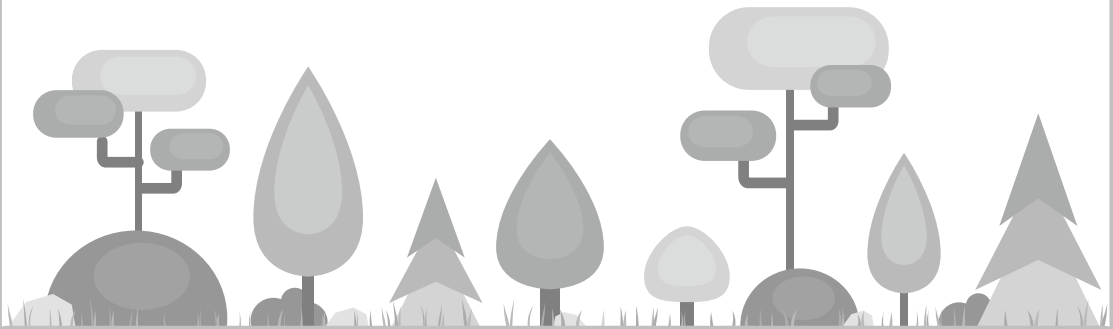
表 1-4. 追大 WIL ストラテジーパートナー

氏名	所属	規程上の種別
佐藤 友美子 氏	追手門学院 理事	第 3 条 (1) 高等教育有識者
山本 啓一 氏	北陸大学 教授	第 3 条 (1) 高等教育有識者
倉部 史記 氏	合同会社倉部史記オフィス 代表 情報経営イノベーション専門職大学(iU) 客員教授 追手門学院大学 客員教授	第 3 条 (1) 大学関連広報有識者
生川 紳一郎 氏	株式会社生川商店 代表取締役 追手門学院校友会 会長	第 3 条 (2) ステークホルダー
牧 文彦 氏	NPO 法人 DeepPeople 理事長 関西 SDGs プラットフォーム教育分科会 「SDGs ナレッジラボ」 事務局長	第 3 条 (2) ステークホルダー
川上 秀輝 氏	トランス・コスモス株式会社 サービス推進総括 人財開発統括部 採用業務推進部部長 兼 新卒採用部副部長	第 3 条 (4) 産業界・人事経験者

## 第2章 WIL正課科目

WILの中心となるのは正課の学科科目および共通教育科目である。2024年度現在は、各科目を担当する教員が、先にあげた「社会有為」「協働性」「発信性」を満たす科目をWIL正課科目として登録する方式と、新たにWILプログラムとして立ち上げ、それを申請する方式とに大別できる。

第2章では、WIL正課科目の概要や直近の事例などについて取り上げる。



## 2-1. WIL 正課科目の概要

正課科目の WIL プログラムには、大別して以下の二通りの分類がある。

- ①担当教員が、WIL の 3 要素を満たす科目について、WIL プログラムとして登録するもの
- ②担当教員が、WIL プログラムを意図して新たに取り組みを立ち上げ、申請を経て登録されるもの

上記の①に関しては、シラバス登録時に各教員が検討し、各学部長の承認をもって WIL として登録される。登録種別として、「単独」「ユニット」の二種類があり、単独で WIL プログラムとして成立するものに加えて、関連する複数の科目をまとめることで WIL の要素を満たすユニット型のプログラムも想定する。シラバスに「WIL 科目の種別」の欄があるため、学生が履修を検討する際に、当該科目が WIL プログラムかどうかを確認することができる。先に示した通り、2025 年度は 53 科目、365 クラスが登録されている。学生による履修ののべ数は 8,803 である。

②については、科目としては「キャリア形成プロジェクト」と「プロジェクト実践 (プロジェクトタイプ)」の二つの枠組みがあり、いずれも登録上は共通教育科目であるが、すべての専任教員が担当可能である。「キャリア形成プロジェクト」は、学期中に実施される、時間割をもった科目であり、2025 年度は年間で 13 クラスが開講された。今年度は 1 つの非常勤講師担当クラスを除く全クラスを WIL 推進センター所属の教員が担当したが、専任教員が新たに WIL 正課科目を構想する際の受け皿として機能している。原則として、実施前年度の 10 月頃に募集を出し、学部内での調整を経たことを条件に教員からの応募を受け付ける。WIL の 3 要素を満たすものについて、共通教育機構を統括する副学長 (以下、「統括副学長」という) の判断により、登録が認められる。一方の「プロジェクト実践 (プロジェクトタイプ)」は、時間割を持たない科目であり、活動の自由度が高いことが特徴だが、活動の記録や時間の管理などを含め、WIL の 3 要素 4 条件を確実に充足することが求められる。事業費補助として最大 10 万円が支給されるため、教員が多様な学生と共に取り組んでみたいプロジェクトがあり、その活動のために資金が必要な場合に有効な枠組みである。年に 3 回募集を行い、WIL の要件を満たすものについては、WIL 推進センター委員会での審議を経て、統括副学長の判断により、登録が認められる。2025 年度の登録は 2 件。



## 歴史的建造物への理解を実地見学とグループ発表から深める

(文学部人文学科美学・建築文化専攻 2～4年生対象、文学部 伊藤 洋子特任教授)

### ■ 概要

日本の歴史的建造物である寺院や神社を対象とし、実地見学を通じて建築的特徴や背景にある芸術・思想を理解することを目的とする。寺社は古来、宗教や学問、思想の拠点であり、建築そのものが優れた芸術を形作ってきた。実物と資料・図面を照合しながら細部まで観察を行うことにより、歴史的建造物への理解を深めるとともに、自らの言葉で論理的に記述・評価できる思考力を身につける。対象は、奈良や京都の古代から近世に至る代表的な寺社である。奈良では薬師寺、法隆寺、東大寺を、京都では妙心寺、北野天満宮、大報恩寺(千本釈迦堂)をそれぞれ見学した。現地では空間構成や形式、技法、機能を詳細に分析し、その「場」で育まれた宗教思想や学問を総体的に考察する。第13回には見学の成果をまとめたグループ発表を実施した。外部より近畿職業能力開発大学の田島幹夫教授、竹口浩司准教授、キングスタジオ株式会社代表取締役の和田光永氏をゲストとして招聘し、学生の発表に対する講評を受け、学びのさらなる深化を図った。



図 2-1. 見学先の薬師寺伽藍

### ■ 学生コメント

文献や平面図といった資料のみでは分かりにくい「梁(はり)の組み合わせ」などの細かな建築構造について、実物を間近で見ることで初めて実感できた。実物を見ることで、インターネットや資料の引き写しではない、自分なりの新しい視点を見つけることができた。私のグループは薬師寺に注目して発表をしたが、他の建造物を担当したグループの発表を聞いても、それぞれの視点があった。発表の際には発表の構成と資料の作成を中心になって進めた。ゲストの方からも発表内容が評価され、自信を得られた。

(文学部 2年生 真田 康平)

### ■ 教員コメント

効率よく見学するために行程を調整し、また2年生をグループ分けしてその中で各自の役割を決め担当してもらった。5月の見学日は予想以上に気温が高くなり、室内見学の時間を長くするなど現場での小さな変更もあった。

グループごとにテーマを見つけて最終発表会に臨むが、歴史的建造物を通して課題を見つけ出すディスカッションが熱心に行われた。



図 2-2. グループ発表時のディスカッション

## 授業内外の発信の場を通じて、英語スキルを向上する

(国際学部 2～4年生対象、国際学部 原 めぐみ 准教授)

### ■ 概要

TESOL (英語教授法) やSLA (第二言語習得理論) を基盤に、実践的な指導技術の習得と英語スキルの向上を目的とした授業である。教職課程履修者が指導力を養う場であると同時に、英語プロフェッショナルのコンセントレーションパッケージ (CP) で学ぶ学生にとっては海外留学先で日本文化を教えるための準備・実践の場となる。

授業の前半では、グループに分かれて中学校の教科書を用いたマイクロティーチング (模擬授業) を行う。それぞれの回において教員からの講評を述べ、指導方法を習得していく。

授業の後半では、グループごとに留学生に向けた日本文化のワークショップを企画する。6月4日にはアメリカからの留学生に対して、7月9日にはオーストラリアからの留学生に対して、ワークショップを実施した。

### ■ 学生コメント

留学生に日本文化を紹介するワークショップの準備では、フィードバックを受けてアイスブレイクやスライド構成、説明方法を改善していった。その過程で英語でのプレゼンテーションへの不安が薄れ、

台本がなくても流れをつかんで話せる自信が身についた。一方で、当日は緊張から留学生への声かけをためらってしまい課題が残った。この経験が、留学先のオーストラリアで積極的に話しかけるきっかけになった。グループで取り組む中で発言が増え、スライド作成の分担など、協働する力も養われたと感じている。

(国際学部2年生 小田 妙然)

### ■ 教員コメント

本授業では、アメリカやオーストラリアからの短期留学生を対象に、学生が日本文化を紹介するワークショップを自ら企画・準備・実践し、英語でのコミュニケーション力向上を目指した。若者ことば、相撲、おりがみ、おはじきや箸を使ったゲームなど多様な活動を行い、学生は協働して課題を達成する力を養い、英語を人前で話すことへの抵抗感も軽減された。さらに、この経験を生かし、オーストラリア留学中に現地で日本文化ワークショップを実施したり、万博をテーマに行った門真市の小中学生を招いた国際交流イベントで日本パビリオンを担当したりするなど、学外で学びを発信する機会にもつながった。



図 2-3. 日本文化ワークショップの様子①



図 2-4. 日本文化ワークショップの様子②

## 大阪の農産物PRを多方面から進める

(経営学部 3年生対象 経営学部 村上 喜郁 教授)

### ■ 概要

経営学部村上ゼミでは、学年段階によって異なる教育内容を設けている。2年生(基礎演習1・2)は「追大学生ビジネスプランコンテスト」等のコンテストへの応募を通じた学習に取り組む。3年生(発展演習1・2)は大阪府(中央卸売市場)や見山の郷などの地域におけるフィールドとの連携プロジェクトに取り組む。4年生(卒業演習1・2)は個人の卒業論文のテーマに取り組む。本記事は其中でも大阪府との連携プロジェクト「大阪産(もん)」について紹介する。

大阪府からの依頼を受け、大阪産(もん)の農産物を広くPRするプロジェクトを推進している。活動は農産物の旬に合わせて、夏には「八尾えだまめ」、秋冬には「泉州きくな」を対象として活動した。

今年度の取り組みとして、泉州きくなのPR動画制作がある。生産者のこだわりや食べ方等についてインタビューして伝える2分程度の動画を複数制作した。動画は大阪府が運営するYoutubeチャンネル「大阪産[もん]アーカイブ」において公開されている。この活動成果について、大阪・関西万博ヘルスケアパビリオンのステージでも発表した。学園祭においては、泉州きくなを用いたチヂミの販売を企画し、2日間で500食以上を販売した。学園祭において大阪府公式「おおさかもん」のInstagramアカウントのPRも行い、2日間で約200人フォロワーを増やした。

### ■ 学生コメント

大阪府中央卸売市場との連携プロジェクトのリーダーとして学生チームを動かした。これまでリーダーとしての経験がなかったが、先生の指示を待つ

ではなく、自ら主体になって動かないと大阪府の方や生産者の方とのやりとりも進まず、物事が進まない、という責任感をもって取り組んだ。メンバーに対する仕事の振り方について、期限を明確に設定する、口頭だけでなく文字でも依頼事項を残しておくなど、実際にリーダーとして取り組みながらそのやり方を改善していった。

(経営学部 3年生 富田 さくら)

ゼミ長として、全体の進捗管理や運営の裏方を担った。村上ゼミでは多くのプロジェクトが同時に動いているので、それぞれの状況を管理する必要がある。特に学園祭の際には2年生のゼミ生も含めた大人数の学生での取り組みとなり、全体をまとめる難しさがあった。看板やポスターの制作が予定通り進まなかった際には、学園祭実行委員会に相談をして、チーム内の取り組みと外部との調整を進めていった。

(経営学部 3年生 網谷 香穂)

### ■ 教員コメント

経営学部村上ゼミでは、座学等で学習した学問や職能の内容について、実際の企業経営と同じく、再統合することを目的とした異なる3種類のプログラムを学年ごとに実施している。特に、2年生次のコンテスト参加を通じた事業計画書作成や3年生次の企業連携活動は、当学のWILに合致するプログラムである。学問を知識として止めるのではなく、個別の知識を再度まとめ上げ応用する力が、学問を実社会で生かすカギだと考えている。



図 2-5. 学園祭における「泉州きくなチヂミ」の模擬店



図 2-6. 大阪・関西万博において制作した動画について発表

## 出張！健幸くらし応援隊

(全学部 1 ～ 4 年生対象、共通教育機構 巽 樹理 准教授・社会学部 松井 健 教授)

### ■ 概要

大学のキャンパス周辺に居住する高齢者を対象とした、心身の健康づくりと社会的孤立の予防を目的とする出張プロジェクトである。茨木市内のマンション（ライフフィールドハイム茨木、ローレルハイツ茨木総持寺）の集会所に出張し、地域の高齢者の方へ運動教室を提供し、交流の場を設ける。プロジェクト発足のきっかけとなったのは、以前は大学で開催する運動プログラムに参加していたものの、病気や身体面の理由で大学まで来られなくなった方の存在である。このような運動教室への参加のハードルを問題意識として、地域の方により近い場所での教室の開催に取り組んだ。開催頻度は各施設について2週間に1回とし、ライフフィールドハイム茨木では8回、ローレルハイツ茨木総持寺では7回の計15回開催をした。施設によって参加者の特徴が異なり、また、参加者によって身体能力が異なるため、運動強度のバランス調整に配慮したプログラム内容の策定が必要となる。学部や学年の異なる13名の学生が参加した。

### ■ 学生コメント

当初は「地域の方とふれあえて楽しそう」という軽い気持ちだったが、活動を通じて意識が大きく変化した。授業で学んでいた「高齢者の孤立」という

社会課題について、悩みを抱える方々に実際に接する中で「何かしたい」という思いが芽生えた。「楽しく会話しながら体力を維持したい」という声に応える企画や、身体能力や状況が異なっても楽しめる工夫、連絡・アンケートを対面配布や手書きで行う配慮の大切さなど、数々の気づきがあった。「この時間が楽しみ」という参加者の言葉が、活動の手応えにつながっている。

(社会学部3年生 長野 心菜)

### ■ 教員コメント

本プロジェクトは、大学周辺地域に暮らす高齢者の孤立や健康課題に対し、教員と学生が協働し、出張型の支援活動を実施したものである。準備段階では戸惑いや不安もあったが、学生たちは地域と向き合い、回を重ねる中で、関わり方に工夫が見られるようになった。高齢者の声や要望を丁寧に受け止め、次回の活動に積極的に反映させていた点は特に印象深い。運動や交流を通じて笑顔を届けるだけでなく、自らの行動が地域にどう影響するかを考える姿勢が育まれたことは、大きな成果である。地域からの評価も高く、大学の教育的意義や社会的信頼にもつながる取り組みとなった。

(巽 樹理)



図 2-7. ライフフィールドハイム茨木における運動教室

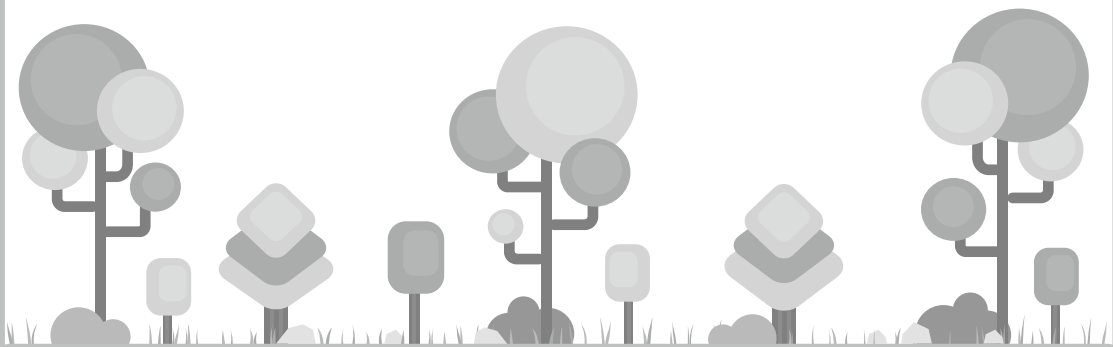


図 2-8. ローレルハイツ茨木総持寺における運動教室

## 第3章 WIL課外プログラム

WILは、正課科目に限らない様々な場面で取り組まれる学生の主体的な活動を想定し、構想当初から、そうした課外の取り組みを推進することを念頭に制度設計をおこなってきた。

第3章では、WILプログラムとして取り組まれる課外活動（追大WIL課外活動）の概要と直近の事例を取り上げる。



### 3-1. WIL 課外プログラムの概要

大学において多種多様に取り組みられている課外活動のうち、WILの要件を満たすものについて、その取り組みを後押しし、学生の学修機会を拡充しようというのがWILの構想当初からの計画であった。2021年度より、追大WIL課外活動は以下の3つの枠組みで推進されている。

- ①「追大WIL コラボ（登録型）」
- ②「追大WIL コラボ（応募型）」
- ③「追大WIL チャレンジ」

※正式名称は「追大WILプログラム奨励金プロジェクト」

上記の①②にある「追大WIL コラボ」は、教職員と学生が協働（コラボレーション）してWILの要件を満たしたプロジェクトに取り組むものを指す。

うち①の「登録型」は、学部・機構・事務部署及び所属教職員等が主催し、学生と協働して実施する課外活動である。それぞれ、すでに当該組織で予算措置されているものや、当該学部の学生に参加を限定しているものが中心となる。WILの要件を満たしているものについて、当該組織での審査を経ていることを前提に、教職員からの申請を受けてWIL推進センター委員会で追大WIL課外活動として承認、登録する。

対して②の「応募型」は、教職員と学生が協働して実施する課外活動のうち登録型以外のもので、認定されると最大10万円の事業費補助が得られる。学部や事務部門等で予算措置されていないことを前提に、指導担当教職員からの申請を受けてWIL推進センター委員会で審議・承認し、追大WIL課外活動として認定される。登録型は随時申請受付、応募型は年3回募集をおこなう。

③の「追大WIL チャレンジ」は、学生発の主体的な課外活動を経済的に支援するために整備された枠組みで、認定されると上限40万円の奨励金が得られる。年3回の募集に対し、こちらは応募の主体も学生となる。応募申請を受けてWIL推進センター委員会が審査し、奨励金給付額の決定をおこなう。学生の発想次第で多様な活動が可能となる。WILの3要素4条件に加えて、以下の要件全てを充足することが求められる。

- (1) 5人以上の学生有志が行う活動であること。
- (2) 学生の主体的な活動を支援すると共に、奨励金管理に対する責任を有する教職員が指導者となること。
- (3) 営利を主たる目的とする活動ではないこと。
- (4) 大学公認団体が、その設立目的に従って行う主たる活動ではないこと。
- (5) 特定ゼミや演習などの学修や研究を目的とした活動ではないこと。
- (6) 活動期間が複数年度にわたらないこと。



# CO<sub>2</sub>ゼロチャレンジ～学園祭の二酸化炭素を減らそう～

(2025年度追大 WIL チャレンジ)

## ■ 概要

学園祭におけるカーボンオフセットの実現を目指したプロジェクトである。主な活動は、11月の学園祭当日における模擬店と展示の2つである。模擬店では、調理用のエネルギーとしてプロパンガスを使用せず、太陽光発電（ソーラーパネルとポータブル電源）へ代替した。また、ゴミ削減のために、汚れたフィルムを剥がして本体を再利用できるエコ容器を導入した。展示活動では、カーボンニュートラルに関する啓発ポスターの掲示のほか、クイズやストラックアウトを用いて来場者が楽しみながらカーボンニュートラルについて学ぶ場を設けた。加えて、CO<sub>2</sub>排出量の算定のために来場者の交通手段についてアンケートを実施した。学園祭終了後は、本プロジェクトの模擬店・展示による排出量と学園祭全体の排出量を算定し、本プロジェクト分のカーボンオフセットのためのカーボンクレジットを購入した。

## ■ 学生コメント

授業でCO<sub>2</sub>削減について考える中で、個人のエコ活動にとどまらず、学園祭という場で社会課題に向き合いたいと考え、プロジェクトを立ち上げた。来場者の関心を引き出せるよう、クイズや体験型企画を取り入れ、交通手段のアンケート調査も実施。模擬店では太陽電池を活用しエコ容器を導入した。リーダーとしては業務分担やメンバーのモチベーション維持・向上に悩む場面も多く、試行錯誤の連続だったが、当日は想定以上の来場者があり、CO<sub>2</sub>削減

の意義を伝えられたことに大きな手応えを感じている。

(経済学部4年生 國岡 璃奈)

学園祭実行委員としての経験や、経済学部・環境経済コースでの学びを実践したいという思いから参加を決めた。学園祭当日は、ポスター告知から展示・アンケート、模擬店へとつなげる導線どおりに来場してもらえるかに不安もあったが、スムーズに回遊してもらい、「すごくいい取り組みだね」と評価の声もいただけた。会計を担当し、資材購入や予算管理を手探りで進める中で難しさも感じたが、活動全体を支える役割の重要性を実感。予算の使い道を管理する責任を担う、貴重な経験になったと感じている。

(経済学部4年生 石井 柚帆)

きっかけは「CO<sub>2</sub>ゼロって本当にできる?」という純粋な好奇心だった。企画や他大学の事例調査に携わるとともに、準備では展示ブースで実施するクイズの問題作成を担当。幅広い年代の方にカーボンオフセットに親しんでもらえるよう、ポスターの中からヒントを見つけられる仕掛けを工夫した。さまざまな年齢層の来場者に興味を持っていただけるとともに、学生の来場者が予想以上に多く印象に残った。若者はあまり関心がないのではと思っていたため、嬉しさとともに、この活動の可能性を実感できた。

(経済学部4年生 津島 暢)

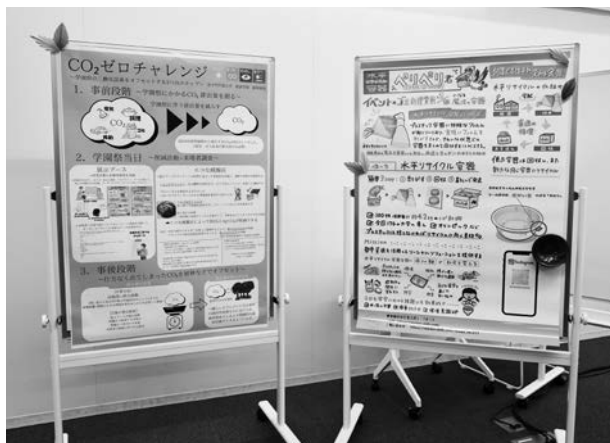


図 3-1. 展示



図 3-2. 模擬店

# 追大ハーベスト

(2025年度追大 WIL チャレンジ)

## ■ 概要

野菜の栽培過程や収穫を体験する機会を地域の子どもたちに提供し、子どもたちの「食」や「自然」への関心を育むことを目的とした活動である。栽培拠点は、茨木市の太田小学校付近において借りた農地である。指導担当教員や地元の農家の方の協力を経て、5月からサツマイモの栽培を開始した。三島小学校、太田小学校など、近隣の施設やこども会への訪問活動を10回、大学へ子どもたちを招いた活動を1回、農地における体験活動を2回実施し、のべ500人以上の地域の子どもの交流を実現した。本プロジェクトの取り組みを発展させ、チャレンジいばらき補助金（学生等連携事業）を活用し、借用する農地や栽培する農作物の種類を増やしている。

## ■ 学生コメント

初めに苦労したのが農地と指導者探しだった。持続可能な農業に精通されている地域創造学部の今堀先生とつながり、農地を紹介いただいて活動が前進。所有者の方にも土壌改良などで大変お世話になった。事前に幼稚園などを複数回訪問し、遊びを通じて関係を深めたことで多くの方の参加も実現した。「農業」「子どもとの交流」に関心のある学生が集まり、50名規模をまとめる立場を経験。個々の思

いを理解し進める大切さを学んだ。多くの人と信頼関係を築き、笑顔で活動を終えられたことが最大の成果だと感じている。

(法学部3年生 高木 悠弥)

当初、農地の土壌が「野菜は育たない」と言われるほど悪く、不安いっぱいだったが、メンバー全員で水やりや草抜きに励み、土づくりを行った。その結果、約200本の苗が見事に育ち、収穫イベントでは子どもたちの満面の笑顔が見られた。次年度への継続を期待し、現在は安全管理や時間配分に関する課題の改善策を検討している。スタート時からメンバーが楽しく取り組めることを重視し、活動の際には初めにゲームなどで仲を深めた。積極的に協働できるチームを築けたことが、成功の原動力になったと感じている。

(心理学部3年生 芝内 風旗)



図 3-3 近隣の太田地区公民館を訪問



図 3-4 サツマイモの収穫体験イベント

# テイキングヘルプデスク

(2025 年度追大 WIL チャレンジ)

## ■ 概要

本学における聴覚障害をもつ学生への修学支援体制づくりを目的とした、学生7名による活動である。

7月から9月にかけては、既存の支援方法に関する調査を実施した。学外調査として、身体障害者支援を行う茨木市の障害福祉センターハートフル、桃山学院大学、愛知淑徳大学へ取材をし、支援の実態や利用者との距離感の取り方、支援学生の組織運営に関する情報などを収集した。

10月には学内調査を実施した。在学中の聴覚障害を持つ学生へのヒアリングにより、講義において必要とされる支援内容の把握を進めた。これらの調査結果に基づき、本学の対面講義に適した支援手法として、補聴援助システム「ロジャーマイク」と音声認識ソフト「UDトーク」を組み合わせた体制を採用した。

11月から12月にかけては、実際の対面講義において計4回の実証実験をした。支援者は2名体制で参加し、教員が装着したマイクから送信される音声をタブレット端末で文字起こしするとともに、誤変換や専門用語の修正をパソコンでリアルタイムに実施した。この試行を通じて、教室内での最適な座席位置の特定や、文字表示のラグ、ディスカッション形式の授業における音声認識の限界といった

運用の課題を抽出した。

1月には、一連の試行結果を反映させた「支援マニュアル」を作成した。本マニュアルには、機材の設置手順やソフトの操作方法、支援時の留意点がまとめられている。2月以降は、これらの活動成果を資料として集約し、学生支援課に対して継続的な支援制度の導入に向けた提案をした。

## ■ 学生コメント

ライティングヘルプデスクでのサポート業務やメンバーへの研修の経験を活かし、聴覚障害を持つ学生へも支援を広げたいと考えた。一過性の企画ではなく、学内制度として定着させることを目標に他大学や福祉施設を計5カ所訪問・オンラインで視察。教室や授業内容に応じた機材やソフトの使い分けに加え、「できることは自分でしたい」との当事者の声から、支援の押し付けにならない配慮の必要性を痛感。現在は共通ルールを整備しつつ、ニーズに合わせて調整できる体制作りで継続的な運用を目指している。

(法学部3年生 嘉郷 天音)

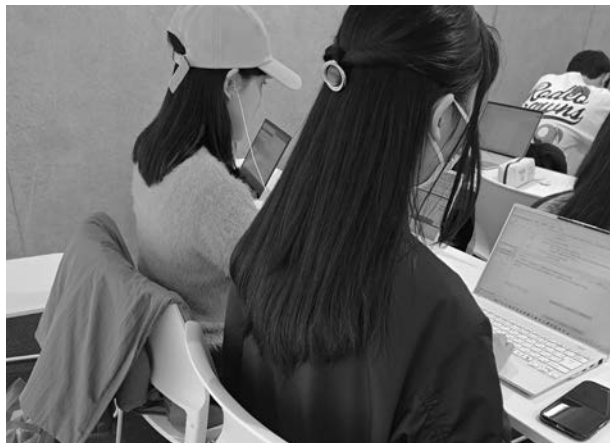


図 3-5. 対面講義における実証実験①



図 3-6. 対面講義における実証実験②

# シニア万博

(2025年度追大 WIL チャレンジ)

## ■ 概要

茨木市の高齢者団体「シニアプラザいばらき」と連携し、高齢者のデジタルディバイド解消を目的としたスマホ教室の運営、およびデジタル活用の実践の場としての大阪・関西万博への同行支援を実施した。

活動の柱であるスマホ教室は、累計で6回（万博訪問前に2回、大学祭で1回、冬季に3回）開催された。参加者はのべ約80名である。教室の運営にあたっては、「交通手段の検索」や「タクシー配車アプリ」などのテーマを設定しつつ、参加者が抱える個別の相談にも応じる形式をとった。

2025年9月17日には、貸切バスを使用し、大阪・関西万博に高齢者20名と学生20名で同行した。事前のスマホ教室では、万博入場に必要ID取得やチケット購入、パビリオンの予約支援を行った。学生チームは事前に現地調査を行い、車椅子の貸出場所、休憩所、飲食店の予約状況などを確認した。当日は5名程度の小グループに分かれ、移動と見学の安全管理を担った。

万博における活動を契機に、地域社会への広がりも生まれた。茨木警察署から特殊詐欺防止に関する連携の依頼を受け、スマホ教室で扱った。シニアプラザいばらきとの連携はスマホ教室のみならず、防災キャンプへの参加やイベントチラシの制作協力といった継続的な協力関係へと発展している。

## ■ 学生コメント

高齢者の方に成果を実践できる場を提供・共有することで、より喜んでもらいたいと考え企画した。スマホ教室の時間内で交通手段の検索、チケット用ID取得などを段階的にサポート。事前に現地トイレや救護室の場所、移動の疲労度などを把握し、当日のスムーズな運営につなげた。課題は多々あったが、必要な場面ではメンバーへ率直に意見を伝える積極性が身に付いた。多くの参加者や関係者の期待を背負う代表としての責任がモチベーションとなり、自らの実践力も多面的に鍛えられたと感じている。

(経済学部3年生 高野 輝)

万博への同行当日は、安全管理のため参加者を4グループに分け、学生責任者を配置。車椅子の手配や、2次元コードと紙のチケットの併用など細部まで配慮に努めた。活動が毎日新聞に取り上げられ、茨木警察署からも高い評価を受けるなど想定外の広がりがあり、嬉しい成果となった。活動を通じて高齢者の方の緊張を和らげ、話を引き出す傾聴力が向上。地域課題解決に向けて実際に住民と関わり信頼を深める意義を実感した。この活動を機に、将来は地域に密着し貢献できる職業を目指したいと考えている。

(経済学部3年生 荒神 利仁)



図 3-7. 高齢者と学生が万博に同行



図 3-8. 学園祭におけるスマホ教室

# 若狭地方の魅力発信と新たなニーズのマーケット調査、若狭ブランドの確立

(2025 年度追大 WIL チャレンジ)

## ■ 概要

福井県若狭地域の知名度向上、魅力発信、マーケット調査を通じた若狭ブランドの確立を目的としたプロジェクトである。現地の民宿経営者や福井県立若狭高校の生徒等と連携して取り組んだ。

11月2日～3日の学園祭では、地域の魅力を紹介するパネル展示と特産品を活用した「若狭焼き」の調理販売した。若狭焼きは、若狭高校の生徒が考案したレシピにもとづき、地元産のブランド牡蠣「うらら」と大阪の食文化である粉物を融合させた共同開発商品である。開催前には学生が作成したプレスリリースを若狭・小浜記者クラブへ配信し、地元住民やメディアへの周知を図った。

学園祭来場者212名を対象にアンケート調査を実施し、若年層にとって若狭が観光の選択肢に入っていない現状を明らかにした。一方で、特産品等の「食」は全世代において来訪動機として有効であることを示した。1月9日には報告会を開催し、今後の観光マーケティングの資料として活動成果を現地関係者に共有した。

## ■ 学生コメント

プロジェクト申請に伴う予算書作成では、活動概要や予算項目に関して差し戻しが続き、10回近く修正を重ねてようやく認可に至った。資金を得るための実務ノウハウを身に付けるとともに、この時点で活動計画を明確化できた。関係者が多く、活動開始後はオンライン会議の日程調整や意思疎通に課題はあったものの、若狭のさまざまな人から多大な協力を得て進めることができた。多様な人と「連携力」を発揮し、自分たちだけでは生み出せない数々の相乗効果を生み出したことが成功の大きな要因だと感じている。

(地域創造学部 4 年生 畑中 孝太)

若狭地域の調査および関係者との連絡調整を担当。調査では若狭の産物・観光資源から PR に適した素材を検討した。海産物に着目し、ブランド牡蠣「うらら」を使ったたこ焼き風の「若狭焼き」を学園祭で販売。レシピは当日パネルディスカッションを実施した若狭高校の生徒によるもので、連携の過程で生まれたアイデアだった。調査の際には、実

際に電車やバスを乗り継いで若狭を訪れ、自分の足や目、舌で確かめた。この経験により認識や価値観が大きく変化。体感して得る生の情報の価値を学ぶことができた。

(地域創造学部 4 年生 高辻 翔太)

若狭地域の交通・地理条件の調査を担当。認知向上にとどまらず来訪促進につなげるため、交通の利点や課題を分析し、二次交通の弱さを補う周遊ルート提案などを行った。学園祭ではアンケートを実施し、若狭訪問の有無や理由を調査。年代により観光に求める内容が異なり、ターゲットに応じた多面的な施策の必要性を実感した。また、現地の方との交流を通じて、すべての人が地域活性化を望んでいるわけではなく、今の落ち着いた暮らしを大切にしたい声もあることを知り、バランスを慎重に考える重要性を学んだ。

(地域創造学部 4 年生 森本 眞輝)

3 年次からの活動を WIL で発展させたいと考え参加。プレスリリース作成やパネル展運営を担当し、「学生がレシピを開発・販売する」だけでなく、「地元高校生がレシピを考案し、大阪の大学の学園祭で調理・販売する」ストーリー性がメディアの関心を集める鍵になると考えた。パネル展では地元出身の方が長時間鑑賞する姿に地元愛を実感。自分たちの活動が、地域にとっても貴重な発信の機会になっていると感じた。テレビ局への就職を希望する中、地域の魅力発信に実践的に関わったことは、有意義な経験となった。

(地域創造学部 4 年生 東本 佑斗)



図 3-9. 学園祭でのパネル展示

# バーチャルOIDAIプロジェクト

(2025 年度追大 WIL コラボ (応募型))

## ■ 概要

経営学部情報システム専攻の有志学生が中心となり、Unityを活用してメタバース上に追手門学院大学総持寺キャンパスを構築・活用する活動である。参加学生は3年生6名、2年生5名の計11名であった。主な活動として、週1回の頻度でUnityの勉強会を実施し、3次元空間の構築技術を習得した。この技術を用いて、総持寺キャンパスの入り口やロビー、校舎のほか、学生が利用する茨木市内のフードコートや飲食店など、学内および周辺のおすすめスポットをバーチャル空間内に再現した。

制作したバーチャル空間は、学内イベントで一般に公開された。7月20日と8月24日のオープンキャンパスでは、高校生を対象にVRゴーグルを用いたキャンパスツアーを実施し、入学後の生活イメージを提示した。11月2日・3日の学園祭では、地域の小学生や住民を対象とした体験会を行い、VR技術を通じた大学および地域の魅力発信を行った。また、インターネットを介して遠方の受験生や留学生の家族がキャンパスを体験できるよう、コンテンツの多言語対応やオンライン公開に向けた準備を進めている。

## ■ 学生コメント

コンテンツの企画に際し、Unityで仮想空間をつくるだけでは受験生や学生を惹きつけられないと考え、楽しめる体験や興味を引く情報を加えた設計を重視。意見を出し合い、ゲーム要素やキャンパス内外のおすすめスポットの情報を盛り込んだ。制作と並行して、学生代表としてスケジュール管理や学内外の関係者との調整も担当。「何をいつまでに、どう実現するか」を考えながら、一つひとつ課題を解決し目標を達成していった。技術的なスキルに加え、将来社会で役立つ実行力を養えた有意義な経験だったと感じている。

(経営学部3年生 伊澤 直輝)

イベントを一から企画し、計画・準備・実施までを担うという経験したことのない挑戦ができた。一つひとつの課題に対し、話し合いを重ねながら、考え抜いて取り組んだ。毎週のUnity勉強会では、スケジュール調整が難航。対面が理想だったが、オンラインも活用し操作動画を共有するなど工夫を重ねた。説明する立場になることで自身も学び直し、メンバーと一緒に新しい発見を得る過程も楽しかった。「誰に何をどう届けるか」を考えイベントとして形にする中で、主体的に行動する力が身についたと感じている。

(経営学部3年生 陸田 太一)

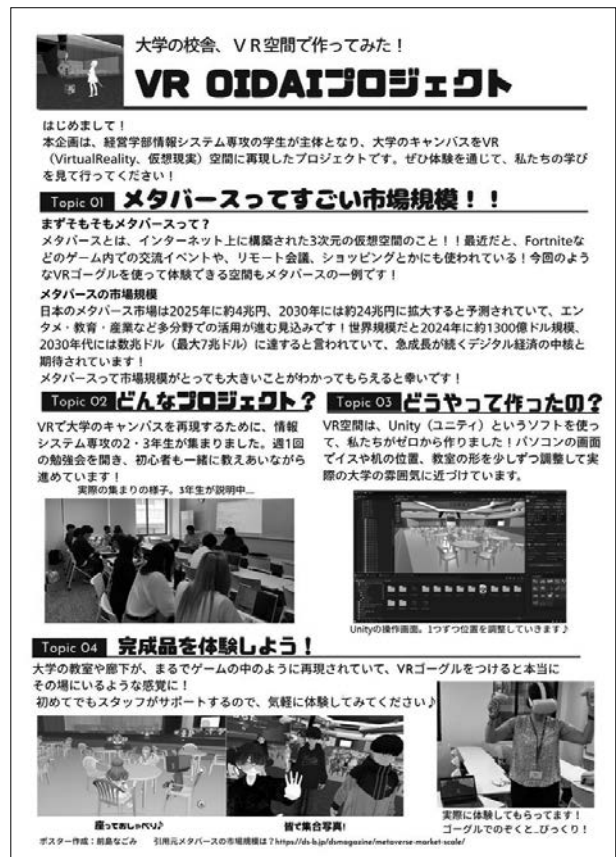


図 3-10. オープンキャンパス時の紹介ポスター

# VR×国際交流プロジェクト

(2025 年度追大 WIL コラボ (応募型))

## ■ 概要

VR (仮想現実) 技術を用いた体験型バーチャルツアーの制作と実施を通じて、国際交流の促進と異文化理解を図る活動である。主な活動内容は、留学生の出身国であるインド、バングラデシュ、ミャンマー、ベトナム、インドネシアの5カ国を題材とした没入型VRコンテンツの制作である。制作工程では、留学生本人または家族や友人から提供を受けた現地の写真や動画を素材とし、日本語および英語による解説原稿の作成、専用アプリ「ThingLink」等を用いた編集を日本出身の学生と共同で進めた。

制作したコンテンツを用い、9月17日に追手門学院高等学校の生徒10名を対象に、9月27日には大阪・関西万博の「ジュニアSDGsキャンプ」の約45名の来場者を対象に、11月26日・27日には追手門学院中学校1年生90名を対象にワークショップを開催した。各イベントでは、VR体験だけでなく、学生による各国の文化解説や語学体験などをおこなった。参加者に対するアンケートから、その国に行きたいという意欲が高まることを発見した。

## ■ 学生コメント

将来に向けてリーダーシップスキルを磨きたいと考え、学生代表を務めた。何をいつまでに進めるのか

を明確にして、メンバーと共有し実現していくチームマネジメントに力を注いだ。当初は面識のなかった他学部の日本人学生とのやりとりにとまどいつつも、活動を通じて協力し合える体制が築けた。VRコンテンツ制作では、母国インドネシアの世界遺産や観光名所に加え、食費など暮らしの様子も紹介。参加者の年齢に合わせた説明で日本語力が向上し、母国への理解を深めてもらえたことにも喜びを感じている。

(国際学部3年生  
WILLIAMS CHRISTOPHER YULIANTO)

母国ベトナムについて、日本では発展途上のイメージを持たれていることが少なからずある点を残念に感じていた。この活動を通して、リアルな「今のベトナム」を知ってもらえたことは大きな成果だと感じている。ベトナムに親しみを持ってもらい、将来、旅行などで訪れるきっかけになれば嬉しい。さらに、「最新のVR技術」と「対面での交流」の両面から伝えられた点にも大きな意義を感じている。私自身にとっても、デジタルスキルや日本語での対応力など多くの学びにつながり、今後社会でも大いに役立つと確信している。

(経営学部4年生 LE HA CAM TIEN)



図 3-11. 大阪・関西万博におけるワークショップ①



図 3-12. 大阪・関西万博におけるワークショップ②

# 追手門ロボットチャレンジプロジェクト

(2025年度追大WILコラボ(登録型))

## ■ 概要

初等中等部ロボット・プログラミング教育研究推進室が中心となって、有志学生を募り、学部や学年の枠を越えた約30名の学生が参画して取り組んでいる。中心的な活動は、地域の小学生を対象にした年3回のSTEAM講座である。7月26日には大阪・関西万博のクラゲ館において特別STEAM講座を開催した。同講座では人型ロボットを用い、社会課題の解決を疑似体験するプログラムを提供した。

加えて、学院内の連携活動として、大学の学園祭でのワークショップ、追手門学院小学校でのロボットチャレンジコンテスト、追手門学院こども園でのロボット講座を実施している。また、URCロボコン世界大会やU18ものづくりEXPOなどの外部イベントにおいても、運営支援として参画した。このほか、茨木市立三島小学校のふるさと祭りでは「ロボットで宝探し」というロボット制御の体験ワークショップを開催した。

## ■ 学生コメント

万博に先がけ学内でSTEAM講座を実施し、技術面や参加者対応は概ね確認できていた。しかし万博では、参加者の人数や年齢、環境も未知の中での

実施だったため、Wi-Fi環境のリスク対応などはしていたものの不安は大きかった。当日は大盛況で、子どもたちにプログラミングやロボットの楽しさを伝えられたことが嬉しかった。年齢層に応じて説明内容やトーンを工夫するなど瞬時の対応力が鍛えられ、学園祭にも活かすことができた。こうしたコミュニケーション力は、今後の人生において必ず役立つと感じている。

(経営学部2年生 浅野 うらら)

今年は人型ロボットの導入により、従来のクルマ型と同様の簡便なプログラミングで、よりダイナミックな動きが可能になった。小学生にも親しみやすく、「すごい」「楽しい」といった反応を通して関心を高め、未来の技術への夢を描く入口になった点に意義を感じている。各企画のコアメンバーを中心に、全員が複数の活動に関わり柔軟に協力し合える体制が取れたことで、多様な活動が実現できた。私も学園祭でリーダーを務め、周囲の知識や意見に真摯に耳を傾け、取り入れていく「頼る力」が身についたと感じている。

(経済学部2年生 迫田 晏次)



図 3-13. 関西万博クラゲ館から依頼を受け実施した特別 STEAM 講座



図 3-14. 三島小学校ふるさと祭りでのロボット講座「ロボットで宝探し」

# 茨木×小豆島コラボプロジェクト

(2025年度追大WILコラボ(登録型))

## ■ 概要

成熟社会研究所が主催する本プロジェクトは、姉妹都市である茨木市と小豆島の地域活性化を目的に、交流促進と課題解決に取り組んでいる。2025年度の活動は主に6つの領域で展開した。

まずコラボビール企画では、地域の各イベントや学内、市内の酒販店で販売・試飲会を行い、両都市の魅力を発信した。コラボランチ企画では、特産品を使った練り天を考案し、企業交渉から製造・販売管理までを学生が担い、茨木市農業祭で完売させた。また、オンラインスポーツ大会を通じ、高校生や両都市の高齢者施設との多世代・地域間交流をデジタル活用により実現した。地域貢献の一環として、市内の各種祭りや小学校での交流会、農業祭での小豆島企業ブースの運営補助にも尽力した。茨木市教育委員会が主催する「オリーブフレンドリーキャンプ」では、両都市の小学生を対象に食育ゲームを企画・運営し、次世代の相互理解を深めた。加えて、茨木市の魅力再発見を目指したフィールドワークを実施し、その成果をまとめた手描きマップを展示することで、茨木市農業祭の来場者へ視覚的に地域の特色を提示した。



図 3-15. オリーブフレンドリーキャンプにおける食育ゲーム

## ■ 学生コメント

6期生として1年次の春から参加し、活動全体を学んだ後、現在まで全体統括を担当している。複数企画のスケジュール管理や会議運営、学内外関係者との連絡に加え、新メンバーが力を発揮できる担当配置も行っている。最も鍛えられたのは多くの情報を把握し、迅速に判断して意見を出す対応力。その基盤にはメンバーとの信頼関係が欠かせないため、率先して対話し行動することを日々心がけている。茨木市の農業祭など外部との継続的な関わりを通じて信頼を重ねられている点にも、喜びを感じている。

(社会学部3年生 木尾 美咲)

全体統括と並行して、小豆島と茨木で子どもたちが交流を深める「オリーブ・フレンドリーキャンプ」にも携わった。茨木での開催として「食育」をテーマに企画。新校舎のアカデミックベースを巡りながら、食材カードを使った宝探しをはじめ多彩なゲームなどを盛り込んで、食を通して両地域について学んでもらえるよう工夫した。7期生だけの取り組みで不安は尽きなかったが、当日は参加者の「楽しかった!」の声に感激。自分たちが動かなければ何も始まらないプロジェクトだけに、多くの学びと最高の達成感があると感じている。

(経営学部2年生 浅野 うらら)



図 3-16. 茨木市農業祭における活動パネルと学生

## 追大WILチャレンジによる支援期間終了後の取り組み

追大 WIL チャレンジ（以下、WIL チャレンジ）は、プロジェクトの活動期間を年度内に限定している。しかし、中には WIL チャレンジによる支援を終了した後も活動を続けているプロジェクトもある。2024 年度の WIL チャレンジとして採択された「追大パーク」の代表学生に話を聞く。

### ■2024年度に追大パークを立ち上げた。

ゼミで少子化について学び、NPO 等へのヒアリングをしていた。その中で、子どもの居場所不足と大学生が子どもと触れ合う機会の少なさを課題として認識した。子どもにとって「年齢の近い大人」である大学生が主体となって運営することに意義があると考えて、ゼミの仲間を中心にプロジェクトを立ち上げた。その後メンバーを募集し、学部・学年を超えた約 40 名のプロジェクトになった。

2024 年度の活動の際は、安全対策が最も大きな課題だった。大学内でも WIL 推進センターから助言を受けていたし、市役所や NPO にも指導を受けていた。これに加えてメンバーの伝手で学童保育で仕事をされている学童指導員の方の協力を得ることができ、初回の試行時に私たちの運営に指導をいただいた。

### ■WILチャレンジの支援期間が終了し、2025年度はどのように活動していたか。

今年度は新しいリーダーに引き継いで、有志約 15 名のメンバーで活動している。多くは地域や学内の他の組織と連携した動きだった。西河原多世代交流センターからの依頼を受けて季節ごとのイベント運営に協力した。学園祭では校友会からの予算支援を受けて活動した。茨木×小豆島コラボプロジェクト（p.23 参照）が小学生を大学に呼ぶイベントを実施した際には、ノウハウを共有して共同でイベントを実施した。

学園祭の際には、理工学部の高橋英之先生が犬

ロボットを連れてきてくださり、子どもたちから大人気だった。これをきっかけに、保護者から「大学ならではの体験を子どもにさせてほしい」といった声も聞くようになった。

2026 年 1 月には、持続可能な運営のあり方を検討するため、実験的に 500 円の参加費制を導入した。広報は過去の参加者へのメール送信や SNS、市役所の掲示板へのチラシ掲示を活用した。募集開始から数日で定員に達し、大学の施設を活用した有料の居場所づくりという形態でも需要があることを確認した。

### ■多くの人や組織の協力をどうやって得てきたか。

情報の収集から協力の要請に至るまでの「即行動」と「レスポンスの速さ」を徹底した。協力者の候補がいれば躊躇せず即座に連絡を取った。2 年目には、地域や団体からの誘いに対して「何でもやってみる」「まずは行ってみる」という姿勢で積極的に応じ、活動の射程範囲とコミュニティのつながりを広げることができた。

### ■ご自身の今後について。

当初は企業への就職を予定していたが、活動を通じて社会に影響を与える経験をしたことで、研究を深めるために大学院進学を選択した。卒業論文では「追大パーク」を事例に、学術機関が子どもの居場所となる独自性を論じた。また、茨木市こども育成支援会議の委員に就任し、若者の視点から行政施策への提言をしている。

（経済学部4年生 坂尻 積義）

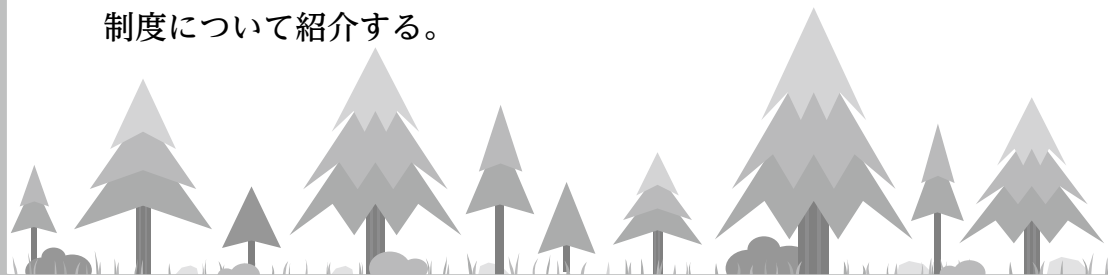
## 第4章 インターンシップ制度

日本では、文部省・労働省・通商産業省（いずれも当時）による三省合意文書が発表された1997年を「インターンシップ元年」と呼ぶ。これを機に、大学教育という観点から、インターンシップは「産学連携教育の一環として行われるものであり、大学が主体者となるべきもの」と考えられるようになり、インターンシップの実施大学と参加学生は徐々に増加した。

しかし、Society 5.0で活躍できる人材の育成に向けて、採用・インターンシップ、大学教育や産学連携のあり方等について、2019年1月からの「採用と大学教育の未来に関する産学協議会」での議論を経て、2022年三省合意が改正された。これにより、インターンシップは再定義されるに至り、各大学では2023年度からインターンシップの位置づけや正規科目上の扱いの変更を迫られた。

本学では、改正三省合意の趣旨を尊重し、環境変化を踏まえながら科目等の再編成を経て、多様な学びの機会を学生に提供することに挑戦してきた。三省合意以降、本学では「インターンシップ」と称していたプログラムを「就業体験」と称しており、本学に関する記述においては「就業体験」で統一している。

この章では、2022年三省合意の改正後のインターンシップの実施状況を踏まえつつ、本学のこれまでの実施実績の推移と制度について紹介する。



#### 4-1. インターンシップとは

1997年、文部省・労働省・通商産業省（いずれも当時、現文部科学省、厚生労働省、経済産業省）による三省合意となる文書が発表され、インターンシップについては「学生が在学中に 自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」として定義された。これを機にこの年が「インターンシップ元年」と呼ばれることとなった。

その後、その三省合意は、2014年、2015年と一部の改正を重ね、2022年に大きく改正された。2022年に改正された三省合意（以下「改正三省合意」）では、インターンシップを「学生がその仕事に就く能力が自らに備わっているかどうか（自らがその仕事で通用するかどうか）を見極めることを目的に、自らの専攻を含む関心分野や将来のキャリアに関連した就業体験（企業の実務を体験すること）を行う活動」と再定義された。

これまでの三省合意は、「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」を定めたものであるが、この改正三省合意はインターンシップにとどまらず、「インターンシップを始めとする学生のキャリア形成支援に係る取組の推進に当たっての基本的考え方」を定めるなど、対象となる支援が広範に及んでいる点が特徴である。その中で、インターンシップのあり方も見直され、「学生のキャリア形成支援に係る産学協働の取組の四つの類型」へと整理された（図4-1）。

出所：[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/sangaku2/20220610-mxt\\_ope01\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/sangaku2/20220610-mxt_ope01_02.pdf)

Ⅲ. 採用・インターンシップ		
学生のキャリア形成支援における産学協働の取組み 各類型の特徴		
(1) タイプ1～4はキャリア形成支援の取組みであって、採用活動ではない。学生は改めて採用選考のためのエントリーが必要。 (2) タイプ1～4からなる学生のキャリア形成支援は、産学が協働しながら、それぞれを推進していくことが重要。 (3) 今回、政府が定める現行の「就職日程ルール」を前提に検討。 (4) インターンシップ（タイプ3・4）に参加できる学生数は、就活予定者の一部（入社就職先でのインターンシップ参加経験がなくても、採用選考へのエントリーは可能）。学生、大学、企業等への周知が重要。 (5) タイプ3は、産学協議会が定める基準（下表の★）を満たす場合に、「産学協議会基準に準拠したインターンシップ」と称する（準拠マークを付すこと可）。 (6) 各タイプの活動を通じて取得した学生情報を採用活動に活用することについて、「タイプ1・2は活用不可」「タイプ3・4は採用活動開始以降に限り活用可」。		
類型	取組みの性質	主な特徴
<b>タイプ1：オープン・カンパニー</b> <small>※オープン・キャンパスの企業・業界・仕事版</small>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">           個社・業界の情報提供・PR         </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>主に、企業・就職情報会社や大学キャリアセンターが主催するイベント・説明会を想定</li> <li>学生の参加期間（所要日数）は「超短期（単日）」。就業体験は「なし」</li> <li>実施時期は、時間帯やオンラインの活用など学業両立に配慮し、「学士・修士・博士課程の全期間（年次不問）」</li> <li>取得した学生情報の採用活動への活用は「不可」</li> </ul>
<b>タイプ2：キャリア教育</b>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">           教育         </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>主に、企業がCSRとして実施するプログラムや、大学が主導する授業・産学協働プログラム（正課・正課外を問わない）を想定</li> <li>実施時期は、「学士・修士・博士課程の全期間（年次不問）」。但し、企業主催の場合は、時間帯やオンラインの活用など、学業両立に配慮</li> <li>就業体験は「任意」</li> <li>取得した学生情報の採用活動への活用は「不可」</li> </ul>
<b>タイプ3：汎用的能力・専門活用型インターンシップ</b>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">           ◆就業体験            ◆自らの能力の見極め            ◆評価材料の取得         </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>主に、企業単独、大学が企業あるいは地域コンソーシアムと連携して実施する、適性・汎用的能力ないしは専門性を重視したプログラムを想定</li> <li>学生の参加期間（所要日数）について、汎用的能力活用型は短期（5日間以上）、専門活用型は長期（2週間以上）★</li> <li>就業体験は「必ず行う（必須）」。学生の参加期間の半分を超える日数を職場で就業体験★</li> <li>実施場所は、「職場（職場以外との組み合わせ可）」（テレワークが解禁化している場合、テレワークを含む）★</li> <li>実施時期は、「学部3年・4年ないしは修士1年・2年の長期休暇期間（夏休み、冬休み、入試休み・春休み）」「大学正課および博士課程は、上記に限定されない」★</li> <li>無給が基本。但し、実態として社員と同じ業務・働き方となる場合は、労働関係法令の適用を受け、有給</li> <li>就業体験を行うにあたり、「職場の社員が学生を指導し、インターンシップ終了後にフィードバック」★</li> <li>募集要項等において、必要な情報開示を行う★</li> <li>取得した学生情報の採用活動への活用は、「採用活動開始以降に限り、可」</li> <li>★の基準を満たすインターンシップは、実施主体（企業または大学）が基準に準拠している旨宣言したうえで、募集要項に産学協議会基準準拠マークを記載可</li> </ul>
<b>タイプ4（試行）：高度専門型インターンシップ</b> <small>※試行結果を踏まえ、今後判断</small>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">           ◆就業体験            ◆実践力の向上            ◆評価材料の取得         </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>該当する「ジョブ型研究インターンシップ（文科省・経団連が共同で試行中）」「高度な専門性を重視した修士課程学生向けインターンシップ（2022年度にさらに検討）」は、大学と企業が連携して実施するプログラム</li> <li>就業体験は「必ず行う（必須）」</li> <li>取得した学生情報の採用活動への活用は、「採用活動開始以降に限り、可」</li> </ul>

出所：採用と大学教育の未来に関する産学協議会（2022）「産学協働による自律的なキャリア形成の推進」『採用と大学教育の未来に関する産学協議会2021年度報告書』

[https://www.keidanren.or.jp/policy/2022/039\\_honbun.pdf](https://www.keidanren.or.jp/policy/2022/039_honbun.pdf)（2024.2.6閲覧）

図 4-1. 「学生のキャリア形成支援における産学協働の取組み

## 4-2. インターンシップの実施状況

文部科学省は、改正三省合意施行後、最初となる調査「令和5年度大学・短期大学・高等専門学校における学生のキャリア形成支援活動の実施状況調査」を実施した。この調査結果の概要は以下の通りである。

表 4-1. 実施校数・実施率

学校種別		R5 実施校数 (実施率)	(参考) R3 実施校数 (実施率)
大学	学部	515 校 (65.8%)	485 校 (62.3%)
	大学院	128 校 (19.4%)	109 校 (16.7%)
	合計	520 校 (64.2%)	489 校 (60.9%)

表 4-2. 国公立別実施校数・実施率

国公立別	実施校数 (実施率)
国立	77 校 (89.5%)
公立	59 校 (57.8%)
私立	384 校 (61.7%)
合計	520 校 (64.2%)

表 4-3. 参加学生数・参加率

学校種別		R5 参加学生数 (参加率)	(参考) R3 参加学生数 (参加率)
大学	学部	54,794 人 (2.0%)	46,262 人 (1.7%)
	大学院	5,488 人 (2.1%)	4,637 人 (1.8%)
	合計	60,282 人 (2.0%)	50,899 人 (1.7%)

表 4-4. 国公立別参加学生数・参加率

国公立別	R5 参加学生数 (参加率)	(参考) R3 参加学生数 (参加率)
国立	16,506 人 (2.8%)	13,202 人 (2.2%)
公立	4,217 人 (2.5%)	2,665 人 (1.7%)
私立	39,559 人 (1.8%)	35,032 人 (1.6%)
合計	60,282 人 (2.0%)	50,899 人 (1.7%)

表 4-5. キャリア形成支援活動の類型別実施校数・実施率

実施状況		
タイプ 2	タイプ 3	タイプ 4
425 校 (52.5%)	360 校 (44.4%)	13 校 (1.6%)

表 4-6. キャリア形成支援活動の類型別参加学生数

実施状況			
タイプ 2	タイプ 3	タイプ 4	合計
37,600 人 (62.4%)	22,629 人 (37.5%)	53 人 (0.1%)	60,282 人

表 4-7. 実施形式別実施校数・実施率

実施状況		
実地のみ	オンラインのみ	実地とオンラインの併用
471 校 (58.1%)	67 校 (8.3%)	213 校 (26.3%)

表 4-8. 実施形式別参加学生数

実施状況			
実地のみ	オンラインのみ	実地とオンラインの併用	合計
45,566 人 (75.6%)	355 人 (0.6%)	14,356 人 (23.8%)	60,277 人 (注 1)

(注 1) 実施形式不明の者がいるため「(3) 参加学生数・参加率」と合計の人数は一致していない。

表 4-9. 学校基本調査分類別・類型別実施校数 (注 1)

分類	実施校数			
	タイプ 2	タイプ 3	タイプ 4	全体校数 (注 2)
人文科学	113 校	96 校	0 校	154 校
社会科学	165 校	148 校	3 校	226 校
理学	21 校	31 校	1 校	40 校
工学	89 校	119 校	4 校	148 校

(注 1) 複数の学校基本調査分類の学部・研究科等を設置している学校種において単位認定を行うキャリア形成支援活動を実施している場合は、それぞれの学校基本調査分類に計上。

(注 2) 全体校数は、各分類において複数の類型で実施している大学は 1 校としてカウント。

表 4-10. 学校基本調査分類別・類型別参加学生数

分類	参加学生数			
	タイプ 2	タイプ 3	タイプ 4	全体校数
人文科学	3,147 人	1,555 人	0 人	4,702 人
社会科学	10,021 人	4,132 人	18 人	14,171 人
理学	491 人	251 人	1 人	743 人
工学	6,872 人	7,830 人	23 人	14,725 人

表 4-11. 実施学年別参加学生数

学年	参加学生数			
	タイプ 2	タイプ 3	タイプ 4	全体校数
1 年	3,493 人	0 人	0 人	3,493 人
2 年	12,854 人	0 人	0 人	12,854 人
3 年	16,265 人	15,140 人	0 人	31,405 人
4 年	2,445 人	1,891 人	0 人	4,336 人
5 年	294 人	545 人	0 人	839 人
6 年	16 人	311 人	0 人	327 人

表 4-1～表 4-11 出所：文部科学省 (2025) 「令和 5 年度大学・短期大学・高等専門学校における学生のキャリア形成支援活動の実施状況について」

[https://www.mext.go.jp/content/20250425-mxt\\_gakushi01-000042017\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20250425-mxt_gakushi01-000042017_03.pdf) (2026.2.26 閲覧)

### 4-3. 就業体験のタイプ

本学では、就業体験の内容と通勤・宿泊形態のタイプによって、追大実践型・ステイ型（国内）・ステイ型（海外）・業務理解型の4つに分類している（表4-12）。就業体験の主な対象が3年生の時は、基本的には業務理解型の受け入れが事業所の中心であったが、対象を低学年に広げていく過程において、より教育的な意義の強い追大実践型の開発に注力してきた。

また、仕事や業務だけではなく、文化・歴史や生活環境などの異なる地域での学びを価値として付加するために、2022年度からはステイ型（国内・海外）として独立させて募集を開始した。

表 4-12. 本学のタイプ別就業体験の分類

区分	内容	業務補助型	課題協働型
		企業の通常業務に学生が取り組むことで、仕事の意義や取り組み方、基本スキルなどを学ぶ。	特定課題に対する調査、企画提案等を行う。社会人基礎力等の汎用的能力の育成に主眼が置かれている。
追大実践型	企業等の「正解のない」課題に関するプロジェクトに取り組む	—	○
ステイ型（国内）	宿泊・滞在を含む。日常と違った環境に身をおいて世界を広げる	○	○
ステイ型（海外）	海外企業におけるプログラム	○	○
業務理解型	主に定常的な業務を体験する	○	—

さらに、プログラム自体を受入先企業等と協働で設計し運営する追大実践型は、本学独自の就業体験といえることができる。大学・受入先企業・学生の関係性を示したのが図4-2である。

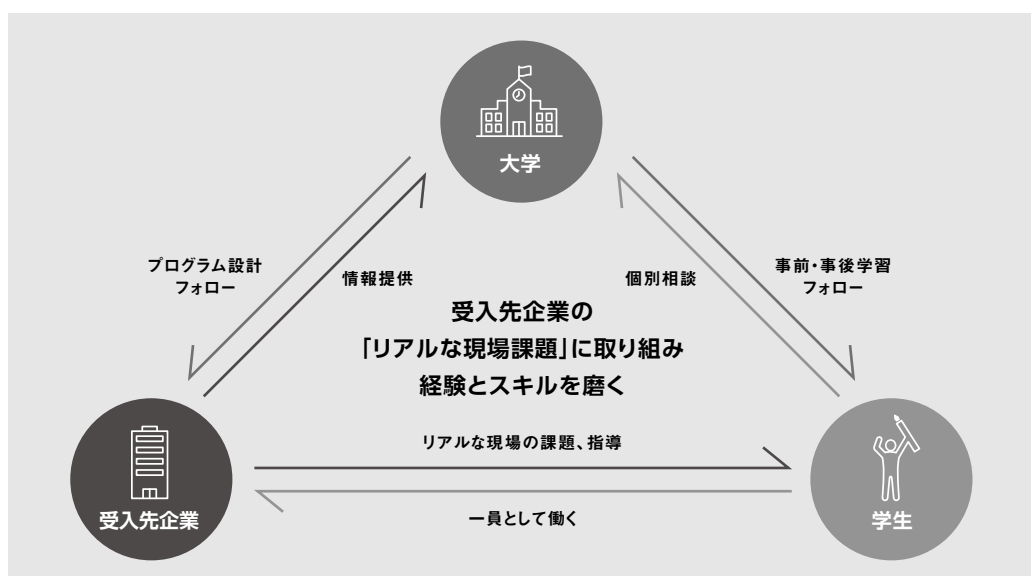
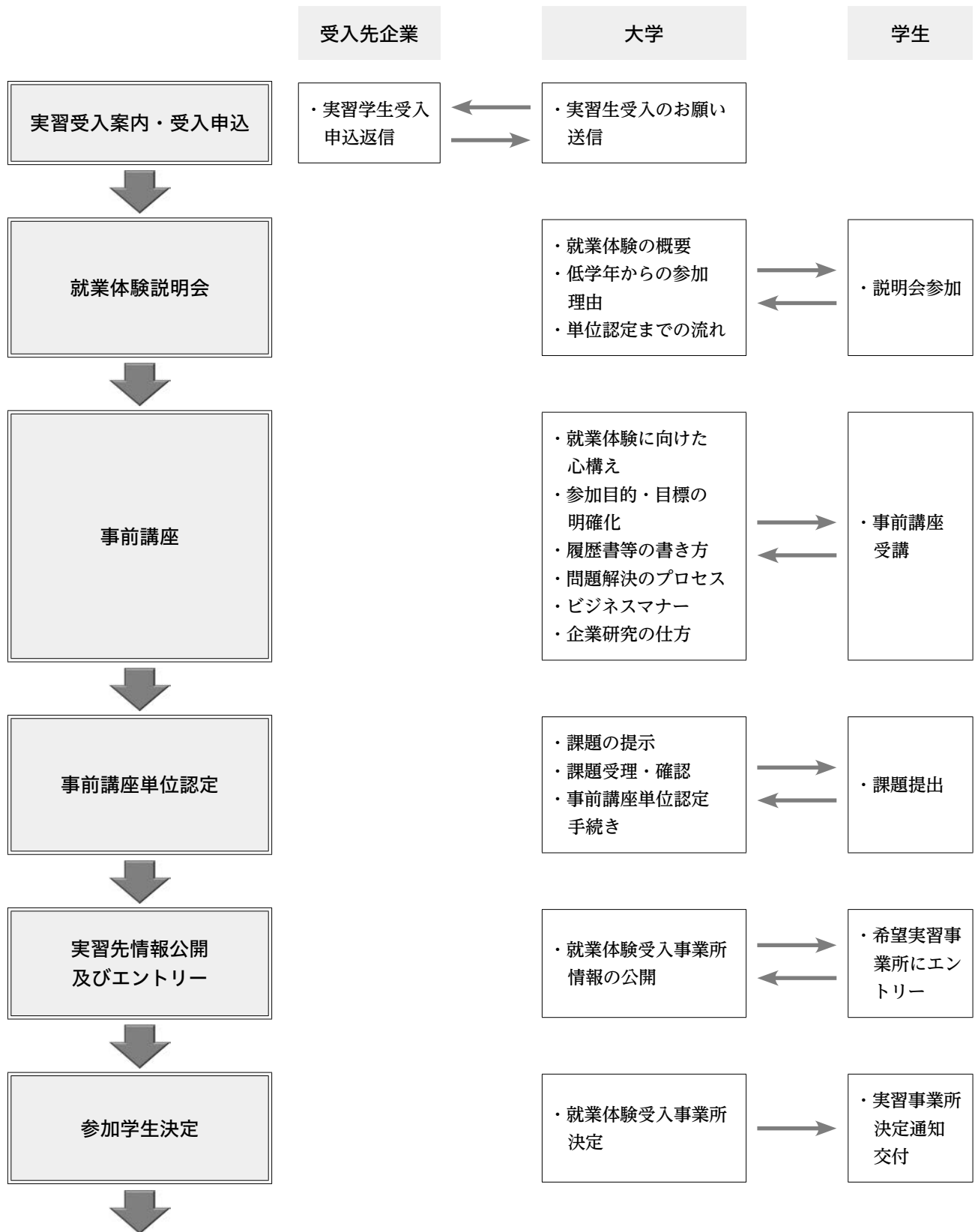


図 4-2. 追大実践型就業体験における関係性

#### 4-4. 就業体験の流れ

本学における就業体験参加の流れは以下のとおりである。



次ページへつづく

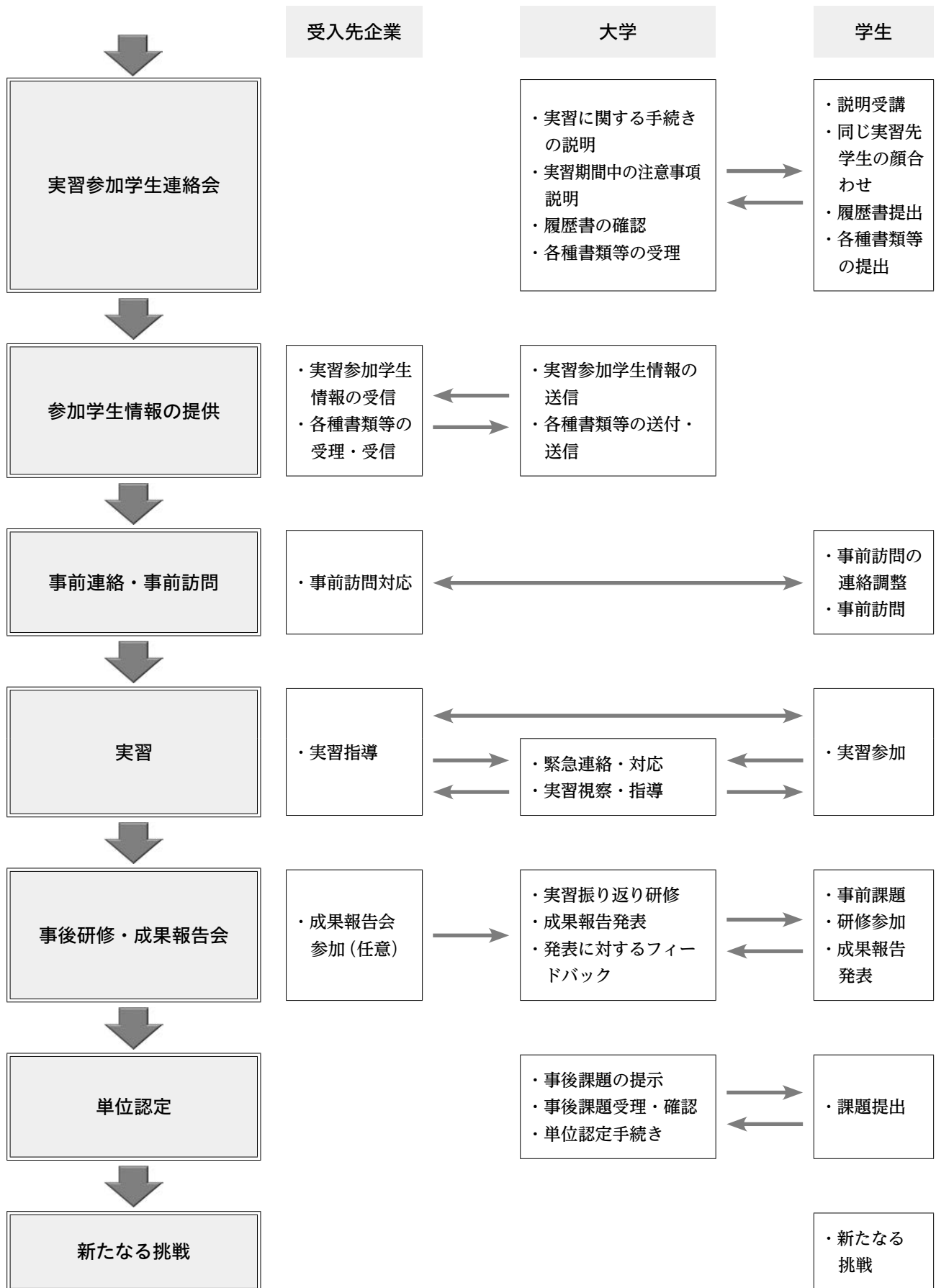


図 4-3. 就業体験の流れ

#### 4-5. 事前・事後研修の実施

就業体験に学生を送り出すにあたり社会人としてのマナーを身に付け、受入事業所に関する情報収集を行い、さらに学生の実習の効果を高めるために、事前・事後研修を義務化している。

2025年度からは、「インターンシップ実習Ⅰ」（認定単位1）をもって事前研修とし、インターンシップ概要に関する説明会を含む全7回を実施した。また、実習先が決定した学生に対し、実習前・実習中・実習後になすべきことを説明し、同じ実習先の学生の顔合わせを行う連絡会を実施した。以下は、いずれも春学期の実施例を示した。

表 4-13. 事前研修「インターンシップ実習Ⅰ」

回数／テーマ	講座概要	事前・事後課題
説明会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プログラムのねらいと概要</li> <li>・単位認定型就業体験の制度</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・説明会参加者登録</li> </ul>
1回目 実習先の見つけ方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習先の探し方</li> <li>・イメージづくりグループワーク</li> <li>・実習先エントリーの方法</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前講座日誌</li> <li>・目的・目標の設定</li> <li>・実習希望先エントリー</li> </ul>
2回目 受入担当者の視点／ 目的・目標設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゲストスピーカー講演</li> <li>・目的・目標設定の共有グループワーク</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前講座日誌</li> <li>・身だしなみチェック</li> <li>・面接の注意点</li> <li>・実習希望先エントリー</li> </ul>
3回目 実践! 模擬面接／みだしなみ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ビジネスマナーの基本</li> <li>・模擬面接グループワーク</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前講座日誌</li> <li>・課題解決ワークシート</li> </ul>
4回目 あらゆる場面で使える! 問題解決の手法①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発想活用グループワーク</li> <li>・課題解決グループワーク</li> <li>・実習先決定の通知</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前講座日誌</li> <li>・自己PR作成</li> <li>・志望動機作成</li> </ul>
5回目 問題解決の手法② 熱意が伝わる「履歴書」の 書き方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題解決グループワーク</li> <li>・自己PR・志望動機の書き方</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前講座日誌</li> <li>・自己PRの修正</li> <li>・志望動機の修正</li> <li>・業種・職種研究</li> </ul>
6回目 優良企業とは? 企業・業界研究	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企業研究グループワーク</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前講座日誌</li> <li>&lt;実習参加学生&gt;</li> <li>・実習先企業・事業所の調査</li> <li>・目的・目標設定シートの修正</li> <li>&lt;実習不参加学生&gt;</li> <li>・企業・事業所研究(2社比較)</li> <li>・社会人インタビュー</li> </ul>

表 4-14. 連絡会

概要	課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習に向けた手続き</li> <li>・実習先への連絡について</li> <li>・事前訪問に向けて</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前講座の課題</li> <li>・連絡会後の課題</li> <li>・実習参加前の課題</li> <li>・実習中課題</li> <li>・事後研修に向けた課題</li> </ul>

表 4-15. 事後研修の実施

概要	到達目標
<ul style="list-style-type: none"> <li>・振り返りワーク</li> <li>・発表・ポスター修正</li> <li>・発表・全体講評</li> <li>・懇親会</li> <li>・当日課題・事務連絡</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「自分」の学びや気づきを整理する</li> <li>・「他者」の体験から新たな視点や気づき・学びを得る</li> <li>・「第三者」に学びと気づきを発表する</li> <li>・今後の活かし方を考える(課題)</li> </ul>

#### 4-6. 就業体験の応募方法の種類

本学の単位認定の対象となる就業体験には、以下の3つの応募方法がある。

表 4-16. 就業体験の応募方法の種類

種類	応募方法
大学紹介	大学が紹介するプログラム・事業所にエントリーする。 ・原則としてすべてのプログラム・事業所が単位認定の要件を満たした内容 ・追大実践型・ステイ型のプログラムが中心
外部仲介	大学が連携している外部の機関を通じて申し込む。 ・単位認定の要件を満たす実習内容かどうかを WIL 推進センターで判断 ＜外部機関例＞ ・大学コンソーシアム大阪 ・兵庫県経営者協会 ・京都府福祉人材サポートセンター ・堺・南大阪地域インターンシップ推進協議会 ・和歌山県経営者協会 ・大阪外国人雇用サービスセンター ・一般社団法人 umi
自己開拓	自分で実習に参加したい事業所を探して申し込む。 ・単位認定の要件を満たす実習内容かどうかを WIL 推進センターで判断

#### 4-7. 就業体験の単位認定について

##### (1) 実習内容

- ①本学が定めるガイドラインに則った、学習効果が期待できる実習プログラムであること
- ②原則として、10 日間（30 時間）以上の連続性のある実習時間が確保されていること  
※時間数は休憩時間を除いた実勤務時間

##### (2) 単位認定の要件となる成果物

- ①実習日誌（様式は大学指定のもの以外も可）の提出
- ②成果報告会での発表資料の提出

##### (3) 研修・成果報告会への出席

- ①事前、事後の全研修への出席と課題提出
- ②夏の就業体験参加の場合は 10 月に、冬春の就業体験参加の場合は翌年度 4 月に開催する成果報告会への出席・発表

表 4-17. 認定単位数

時間数	単位数
30 時間以上	1 単位
+ 30 時間以上（計 60 時間以上）	+ 1 単位（計 2 単位）
+ 30 時間以上（計 90 時間以上）	+ 1 単位（計 3 単位）
+ 30 時間以上（計 120 時間以上）	+ 1 単位（計 4 単位）

※単位認定はプログラムごとで行われる

#### 4-8. 就業体験の実績

表 4-18. 就業体験事前講座参加学生数

学年 / 参加年度	2025
1 年生	112
2 年生	21
3 年生	1
4 年生	1
総計	135

※秋学期参加学生は含まれていない。

表 4-19. 就業体験受入事業所数・学部別参加学生数推移

年度	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
受入先事業所数(社)	113	105	108	126	149	158	153	146	143	23	25	35	22	19	23
文学部	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	9	8	7	14
国際学部	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	0	1	3	4
国際教養学部	26	19	19	18	32	33	37	66	55	15	27	33	6	0	0
心理学部	37	16	26	55	48	53	56	83	79	25	8	15	8	7	10
社会学部	40	37	24	38	39	35	40	48	36	31	24	20	27	35	38
法学部	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	4	3	3
経済学部	43	28	51	31	73	73	82	84	64	15	12	20	8	7	10
経営学部	59	91	81	79	93	101	104	109	96	23	16	23	15	19	30
地域創造学部	*	*	*	*	6	5	33	42	46	15	19	28	12	13	24
理工学部	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	3
交換留学生	0	0	0	0	0	1	0	5	0	0	0	0	0	0	0
参加学生数(人)	205	191	201	221	291	301	352	437	376	124	106	148	89	94	136

※ 2024 年度については途中辞退者を反映したため、WIL 推進センター年報第 3 号と一致しない。

表 4-20. 年度別就業体験単位認定数推移

学年 / 参加年度	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
1 年生	*	*	*	*	84	52	99	214	202	60	41	80	47	64	72
2 年生	*	*	*	87	54	86	155	165	201	75	96	167	103	152	60
3 年生	400	374	385	344	251	261	281	164	95	13	6	69	23	4	3
4 年生	0	0	0	0	0	5	0	4	15	1	6	0	0	3	0
総計	400	374	385	431	389	404	535	547	513	149	149	316	173	223	135

※ 2025 年度には、秋学期実習参加学生の単位認定数は含まれていない。

## 追手門学院大学WIL推進センター

### ■実習概要

追手門学院大学WIL推進センターが福井県庁の協力を得て行う就業体験で、テーマは「地域を元気にする地方自治体（県）職員志望者を増やせ!!」である。

この就業体験は、福井県が抱える課題の一つである、県職員志望者減少傾向に対する解決策を考え提案する実習と、福井県大阪事務所主催の産学官連携イベントに福井県職員の立場で参加する実習の2部から構成されている。イベントでは、大阪府立生野工業高校の生徒、同大阪ビジネスフロンティア高校（OBF）の生徒とも協働する場面があり、相互に学びを深める機会にもなった。

実習期間は10日間で、それぞれの実習内容と実習場所は、以下の通りである。

地域を元気にする地方自治体（県）職員志望者を増やせ!! 就業体験（インターンシップ）スケジュール			
	日程	内容	活動場所
1	8/29(金)	オリエンテーション、大阪事務所見学、福井県の現状説明、アンケート指導	福井県大阪事務所
2	9/2(火)	講義：行政職とは、現役職員座談会、福助堂イベント打ち合わせ	福井県大阪事務所
3	9/3(水)	アンケート設計、ブランディング講座、提案打ち合わせ	追手門学院大学
4	9/5(金)	福井県大阪事務所の課題、イベント会場見学・打合せ	福井県大阪事務所 福助堂※
5	9/6(土)	イベント実施	福助堂※
6	9/8(月)	イベント振り返り、福井県PRイベント提案	追手門学院大学
7	9/9(火)	アンケート分析、課題の議論、解決策検討	追手門学院大学
8	9/10(水)	アンケート分析、課題の議論、解決策検討	追手門学院大学
9	9/11(木)	発表用資料作成	追手門学院大学
10	9/12(金)	発表・フィードバック	福井県大阪事務所

※生野本通中央商店街 大阪市生野区生野区林寺2-1-4

図 4-4. 就業体験スケジュール

### ■参加学生の声

まず、この就業体験に応募したのは、①社会人として必要な知識やマナーを学ぶ、②自分自身の課題や強みを知る、地方自治の仕事への理解を深めるためだった。

初日の実習時に県職員のイメージアンケートを行い、福井県庁職員の方が持つイメージと、学生が持つイメージが大きく異なっていることに気づいた。学生は、県職員の仕事は「定型的な仕事が多い」と思っていたが、SNSを使った情報発信、イベントを通じて

の住民との繋がり、住民に寄り添いながら進める仕事など、意外と柔軟性があるものも多く、一人ひとりの発想力や柔軟性が求められ、挑戦的な面があることを知った。また、定期的な異動によって、いろいろな場所で、多様な仕事にも携わることができ、成長を後押ししてくれると感じた。

この就業体験を通して自身の課題だと認識したのは、圧倒的な発想力や表現力の不足だ。県職員を増やすための施策として、「北陸3県合同採用試験」を提案したが、私はメリットが少ない提案だと思った。しかし、合同試験にすることで、受験生の負担を減らすと共に複数出願を促進できる、複数合格した受験生はより働きやすい県を選択できるため自ずと県と県の間で競争が起きる、など多角的な視点からのアイデアに驚いた。県庁職員の方の前での発表に向けたスライド作成の際は、どのような見せ方や言葉選びをしたらよいか、なかなか発言ができなかった。発想力や表現力不足は、自身の伸びしろだと実感した。

一方、福助堂でのイベントの際には、OBFの生徒とも協力しながら、オリジナルせんべいの販売をしたが、お客様にも生徒にも、言葉遣いに気を付けながら大きな声で声がけをするなど、積極性や明るさは評価していただけて、自信になった。

今回見つけた自分自身の課題や強み、そして得た知識をこれからの大学生活やその先に待っている就職活動の際にも活かしていきたいと思う。

(地域創造学部1年生 中谷 翠)



図 4-5. 福井県庁職員の方に向けたプレゼンテーション

## 株式会社ガンバ大阪

## ■概要

ガンバ大阪プロジェクト実践は長期実践型就業体験のプログラムである。ガンバ大阪の本拠地・パナソニックスタジアム吹田の開業と同時に2016年から開始した。学生の参加期間は6ヶ月以上を原則としている。2025年度は他の実習先と同様に年2回の募集とした。2025年12月現在は43名の学生が活動している。

2025年度の新たな取り組みとして、茨木市と連携し、茨木市文化・子育て複合施設 おにクルで実施されたパブリックビューイングへのイベントブース出展がある。学生たち自身による企画として、おにクル内を回るクイズラリー、横断幕への応援メッセージ、ポッチャを実施した。

## ■参加者の声

多くの人や組織と連携しながら物事を進めることの難しさを学んだ。自分たちの目の前の作業だけでなく、企画案が市役所や企業の中で承認されるためにどのような手順があるかなど、もっと全体を見ておくことが必要だったと思う。また、プロジェクトメンバー内での仕事の共有と分担に苦慮した。何を目的やねらいとしているかを具体的に伝えないとうまく進まないことを実感した。今回の経験を新しいメンバーに引き継いで次の取り組みに活かせるようにしたい。

(経営学部2年生 大城 まほろ)

茨木市役所やガンバ大阪との打ち合わせの場で、企画のプレゼンテーションをした。自分たちとしては考え抜いたつもりの案でも、その詳細や1つひとつのことのねらいなど、打ち合わせの中で足りていない部分を指摘され、社会人の考えの深さを感じた。企画作りには苦勞したが、ポッチャのブースで子どもたちが繰り返し遊んで楽しんでくれる様子や、自分が発案した横断幕が来場者からのメッセージでいっぱいになっているのを見た時は、大きな達成感があった。

(社会学部2年生 戸田 大誠)

当初考えていた企画に問題があり、代案を出す必要があったが、なかなか新しいアイデアをまとめられず再提案に時間がかかってしまった。一方で茨木市役所の職員やガンバ大阪の社員が矢継ぎ早にやりとりを交わっていて、企画を考えて実現するに至るまで

の1つひとつの行動や連絡に対する社会人のスピードの速さに驚いた。ゼロから企画を考えていろいろな人とやりとりをして実現していくという、いままでにない経験ができた。

(社会学部2年生 松尾 佳和)

表 4-21. これまでの参加人数

	活動開始	人数
1期生	2016年2月	15
2期生	2016年5月	26
3期生	2016年10月	4
4期生	2017年4月	38
5期生	2017年8月	2
6期生	2017年10月	2
7期生	2018年4月	5
8期生	2018年4月	32
9期生	2018年8月	6
10期生	2018年10月	3
11期生	2019年2月	1
12期生	2019年4月	44
13期生	2019年8月	6
14期生	2019年10月	2
15期生	2020年2月	1
16期生	2020年9月	23
17期生	2020年11月	6
18期生	2021年5月	23
19期生	2021年11月	13
20期生	2022年5月	25
21期生	2022年7月	14
22期生	2022年10月	4
23期生	2023年5月	23
24期生	2023年8月	6
25期生	2023年11月	1
26期生	2024年5月	27
27期生	2024年8月	1
28期生	2024年12月	4
29期生	2025年7月	38

注 活動中の辞退等により単位認定対象とならなかった学生を除く



図 4-6. おにクルを回るクイズラリーの案内をする学生

## 株式会社サカイ引越センター

実習期間：

2025年9月8日～9月19日（10日間）

### ■概要

引越業界国内シェアトップを誇る株式会社サカイ引越センターにて、広報業務を軸とした10日間の実習プログラムを実施した。本プログラムでは、実際に外部へ発信されるプレスリリースの作成や、競合他社のSNS運用事例に関する調査・分析、そして今後の運用に向けた企画提案に取り組んだ。特に注力したのは、「採用強化に繋がるSNS運用」の提案である。学生たちは実習を通じて、引越業から想起されがちな「現場での力仕事」というイメージの背景に、広報や人事といった多岐にわたる間接部門の職種が存在していることや、福利厚生制度の充実とともに「フレンドリーな社風」を理解した。これらの経験に基づき、学生ならではの視点で「サカイ引越センターでの就業意欲を喚起する」ためのコンテンツを企画。同社の多面的な魅力を同世代へ向けて発信するという課題に取り組んだ。実習の最終日には、部門長をはじめとする社員の方々に、実習期間の集大成として企画案のプレゼンテーションを実施した。プロの視点からのフィードバックを受けることで、自身の分析結果や提案の妥当性を検証。単なる業務体験に留まらず、企業の課題解決に資するアウトプットを導き出すまでの「問い・実践・振り返り」のプロセスを経験した。

### ■参加者の声

今回の実習では、広報業務を通じて、相手の受け取り方を考慮した戦略的な情報発信の重要性を学んだ。SNS運用やプレスリリース作成の体験では、一言一句に責任が伴うことを実感し、読み手への配慮や正確な表現の難しさを知る貴重な機会となった。また、資料作成においても「相手目線」に立つことの大切さを再認識した。特に印象的だったのは、サカイ引

越センターで働く方々の姿だ。社会人としてのマナーや細やかな心遣いが周囲との信頼関係に繋がる様子を目の当たりにし、自分も将来このように振る舞えるようになりたいと強く感じた。実習全体を通して、働くとは単に個人の作業をこなすことではなく、チームで協力し、周囲と連携して初めて成果が生まれるものだと理解した。この経験で得た「責任感」や「多角的な視点」を今後の大学生活や資料作成に活かし、自らの課題を一つひとつ克服しながら、さらなる成長へとつなげていきたい。

（地域創造学部2年生 萩原 志帆）



図 4-7. 実習の様子①



図 4-8. 実習の様子②

## 第5章 成果

WILの推進・実践によって得られる成果として、第一には学生の学びと成長が挙げられる。加えて、社会有為の取り組みが生み出す社会的価値そのものや、取り組みが社会的に注目されることによる広報効果も考えられる。

第5章では、WIL推進の成果を、活動の成果報告会にあたる「WIL AWARDS」と、これまでの広報実績、そして学生の学修効果を分析するためのアセスメントの3点から取り上げる。



## 5-1. WIL AWARDS

2026年3月11日(水) 13:00~16:30、追手門学院大学総持寺キャンパスBNC101教室において、2025年度に実施されたWILプログラムの成果報告をおこない、優れた取り組みを表彰する「WIL AWARDS」が開催された。本年度は応募チームが10チームあったため、WIL推進センター委員の事前審査により、登壇によって発表する5チームを決定した。登壇の有無にかかわらず、応募チームについてはポスター展示による発表を設けた。

当日は金政祐司副学長および追大WILストラテジーパートナー (p.6参照) を審査員とし、5チームのWILプログラムがそれぞれ7分間の持ち時間で成果報告プレゼンテーションをおこなった。

また、入学前プログラムの自由参加プログラムの一部としてWIL AWARDSを告知し、2026年度入学予定者についても観覧者としての参加を募集した。

表 5-1. 2025 年度 WIL AWARDS 結果

賞名	プログラム名	種類	概要	代表学生名	担当教職員
最優秀賞	追大ハーベスト	課外活動：追大 WIL チャレンジ	野菜の栽培過程や収穫を体験する機会を地域の子どもたちに提供し、子どもたちの「食」や「自然」への関心を育むことを目的とした活動。地域の学校や子ども会などへの訪問もおこなった。	法学部 3年生 高木 悠弥	地域創造学部 今堀 洋子
将軍山 会長賞	出張！健幸くらし 応援隊	正課科目： プロジェクト実践 (プロジェクトタイプ)	地域の高齢者の声から始まった出張型運動プロジェクト。2カ所まで15回開催し、学生が心身の健康と笑顔を届ける。	社会学部 3年生 長野 心菜	共通教育機構 巽 樹理 社会学部 松井 健
WIL 特別賞	追手門ロボット チャレンジ プロジェクト	課外活動：追大 WIL コラボ (登録型)	プログラミングによるロボット制御を軸としたSTEAM 講座を運営。関西万博「クラゲ館」での実践や地域交流を通じ、子どもたちが技術と社会課題を学ぶ機会を提供した。	経済学部 2年生 迫田 晏次	初等中等部 ロボット・プログラミング 教育研究推進室 福田 哲也
優秀賞	CO <sub>2</sub> ゼロチャレンジ ～学園祭の二酸化炭素を減らそう～	課外活動：追大 WIL チャレンジ	学園祭のカーボンオフセットを目指し、太陽光発電による模擬店運営やエコ容器導入を実践。クイズ展示や交通手段調査も行い、排出量の算定・相殺を通じて脱炭素を啓発した。	経済学部 4年生 國岡 璃奈	経済学部 何 彦旻
優秀賞	茨木×小豆島 コラボプロジェクト	課外活動：追大 WIL コラボ (登録型)	姉妹都市である両地域の地域活性化を目指し、特産品によるコラボ食品企画や子どもたちの交流イベントに取り組む。食やデジタルを通じた多世代交流、農業祭でのブース運営など多角的な活動を展開した。	経営学部 2年生 浅野 うらら	研究企画課/ 成熟社会研究所 中川 啓子
優秀 ポスター賞	テイキングヘルプ デスク	課外活動：追大 WIL チャレンジ	聴覚障害学生の修学支援体制づくりを目指し、他大学や福祉施設を調査。音声認識ソフトと学生によるリアルタイム修正を組み合わせた支援手法を確立し、運用マニュアルを作成して大学に提案した。	法学部 3年生 嘉郷 天音	共通教育機構 増地 ひとみ
奨励賞	シニア万博	課外活動：追大 WIL チャレンジ	茨木市の高齢者と連携し、スマホ教室と万博同行支援を実施。ID取得から当日の安全管理まで学生が伴走した。デジタル格差の解消を通じ、地域に密着した継続的な協力関係を築いた。	経済学部 3年生 高野 輝	経済学部 長町 理恵子
奨励賞	若狭地方の魅力発信 と新たなニーズの マーケット調査、 若狭ブランドの確立	課外活動：追大 WIL チャレンジ	民宿経営者や高校生と連携し、若狭の特産品をPR。地元高校生と「若狭焼き」を共同開発し、学園祭で販売した。アンケート調査からは観光の課題を明らかにした。	地域創造学部 4年生 畑中 孝太	地域創造学部 牧野 光朗
奨励賞	バーチャル OI DAI プロジェクト	課外活動：追大 WIL コラボ (応募型)	Unity を用いて仮想空間に総持寺キャンパスを構築。VR ゴーグルによるキャンパスツアーや交流イベントを、高校生や地域住民へ大学と地域の魅力を発信した。	経営学部 3年生 伊澤 直輝	経営学部 上田 真由美 経営学部 國島 文生 共通教育機構 アリザデ メラサ
奨励賞	VR ×国際交流 プロジェクト	課外活動：追大 WIL コラボ (応募型)	留学生の出身5カ国を題材に、VR コンテンツを制作。高校や万博会場等でワークショップを開催し、現地の映像と解説で異文化体験を提供した。	国際学部 3年生 Williams Christopher Yulianto	共通教育機構 アリザデ メラサ 共通教育機構 Katherine Thornton 経営学部 上田 真由美

## 5-2. WIL に関する広報実績

新聞やWEBメディアでの掲載実績を中心に、2025年度のWILプログラムに関連する主な広報実績を以下にまとめる。

表 5-2. 広報実績

No.	掲載日	メディア名	タイトル	種類	担当教員	プログラム
1	2025年 2月6日	朝日新聞 大阪地方版/ 大阪	北と南の味、思わぬ出会い 茨木・追手門学院大生× 羽曳野・タケダハム、新 商品/大阪府	正課科目 (2024年度)	経営学部 朴 修賢	発展演習1・2 (朴ゼミ)
2	2025年 2月21日	PR TIMES	【白川村公式】8割の旅行 者が「混雑対策をしたい」 と回答	正課科目 (2024年度)	地域創造学部 岡田 美奈子	地域創造実践 演習(発展)2 (岡田ゼミ)
3	2025年 3月1日	朝日新聞 大阪地方版/ 大阪	大阪産の菊菜、食べて推して 出荷量日本一、府×追手門 学院大×飲食店タッグ	正課科目 (2024年度)	経営学部 村上 喜郁	発展演習1・2 (村上ゼミ)
4	2025年 4月11日	水都大阪	水都大阪アカデミアの成果 発表会が開催されました	正課科目 (2024年度)	地域創造学部 岡田 美奈子	地域創造実践 演習(入門)2 (岡田ゼミ)
5	2025年 6月25日	朝日新聞 大阪地方版/ 大阪	死と向き合う、若者の苦悩 追手門学院大生、実体験 を演劇に あすから	追大WIL コラボ (登録型)	社会学部 横田 修	STEP (舞台表現 プロジェクト)
6	2025年 8月30日	福井新聞	関西都市部の学生 福井県庁業務学ぶ 大阪事務所がインターン	正課科目	WIL推進 センター	単位認定型 就業体験 (追手門学院大学 WIL推進センター (福井県との連携 プログラム))
7	2025年 9月18日	PR TIMES	売上高12年連続No.1引越 のプロが生まれる!研修ハウ スについてインターンシッ プ生がプレスリリースを作成	正課科目	WIL推進 センター	単位認定型 就業体験 (株)サカイ引 越センター)
8	2025年 9月19日	毎日新聞 地方版/大阪	EXPO2025 大阪・関西: シニアと同行、笑顔の交流 追手門学院大生ら スマホ活用を支援	追大WIL チャレンジ	経済学部 長町 理恵子	シニア万博
9	2025年 11月22日	読売新聞 大阪夕刊	[月刊大学] 11月号 四天王寺大など 授業時間拡大 深まる学び	正課科目	WIL推進 センター	単位認定型 就業体験 (伊丹市立図 書館ことば蔵)
10	2025年 10月23日	信濃毎日新聞	天竜峡銘菓「檜笠煎餅」復活 26日の催しで販売 観光地活性化願ひ	正課科目	地域創造学部 牧野 光朗	地域創造実践 演習(発展・総括) (牧野ゼミ)
11	2025年 12月15日	交通新聞	自治体・大学と連携の取り 組み「カレッジ」 魅力発掘や課題解決へ提言	正課科目	地域創造学部 安本 宗春	地域創造実践 演習(基礎) 1・2、(展開) 1・2(安本ゼミ)

なお、WIL プログラムの実践事例については、大学 WEB サイトに「WIL レポート」のページがあり、2026年1月現在、55件の事例が掲載されている。

<https://www.otemon.ac.jp/guide/neweducation/wil-report.html>



### 5-3. WILに関する表彰事例

WILの取り組みの一部については、学内外から表彰された事例もある。2025年度のWILプログラムに関連する主な事例を以下にまとめる。

表 5-3. 表彰事例

No.	プログラム	種類	担当教員	賞の名称	表彰した団体
1	経営学部 基礎演習 1・2 (村上ゼミ)	正課科目	経営学部 村上 喜郁	【明治安田杯 第16回 追大学生 ビジネスプランコンテスト】 優秀賞、質疑応答賞、奨励賞	追手門学院大学 ベンチャービジネス 研究所、経営学部
				【第1回 グッズ開発セミナー 成果発表会】 最優秀賞、優秀賞	
2	経営学部 基礎演習 1・2、 発展演習 1・2、 卒業演習 1・2 (山下ゼミ)	正課科目	経営学部 山下 克之	【関西大学 ビジネスプラン・ コンペティション KUBIC2025 「学生の力」第20回本選会】 優秀賞	関西大学商学部
				【明治安田杯 第16回 追大学生 ビジネスプランコンテスト】 明治安田特別賞、優秀賞、 奨励賞、プレゼンテーション賞	追手門学院大学 ベンチャービジネス 研究所、経営学部
3	地域創造実践 演習（展開）2 <藤原ゼミ>	正課科目	地域創造 学部 藤原 直樹	【令和7年度「副首都・大阪」 大学連携プロジェクト リサーチ・プレゼンテーション コンテスト】 銀賞、銅賞	大阪府・大阪市 副首都推進局
4	地域創造実践 演習（基礎・ 展開）1・2 <安本ゼミ>	正課科目	地域創造 学部 安本 宗春	【日本国際観光学会第29回 全国大会 動画発表コンクール】 アカデミックアワード	日本国際観光学会
				【滋賀カレッジ成果報告会】 優秀賞	JR 西日本
5	キャリア形成 プロジェクトM (デザインの力 で課題解決)	正課科目 (2024年度)	共通教育 機構 非常勤講師 牧 文彦	【第7回 関西 SDGs ユース アクション 2025】 グッドアクション賞 大学生の部 優秀賞	関西 SDGs プラットフォーム



#### 5-4. WILによる学修成果の可視化

WIL推進センターでは、追大WILによる学修成果の可視化のための試行的な取り組みを行っている。センター所属教員が担当する一部の正課科目において、事前事後の自己評価（セルフチェック）を履修学生に求めている。

自己評価はLMSから授業内もしくは授業外の課題として実施する。半期の授業の場合は1~2回目と12~13回目において、就業体験の場合は事前事後の研修の課題として実施する。評価項目は、大学全体で採用しているPROGにおけるリテラシーおよびコンピテンシーに関するセルフチェックシート（『PROGの強化書 ver.10.0』、pp.38-39）にもとづく。事後の自己評価を行った後には、個々の学生に対して、それぞれの回答内容をグラフ化してフィードバックしている。これらをもとに、WIL科目を通じた学生の成長の可視化に取り組み、授業内容や学生の取り組みと成長の関連について検討している。

図5-1と図5-2は2025年度春学期の単位認定型就業体験に参加した学生のうち、実習先事業所の社員・職員からの評価を得ることができた学生（8事業所で実習をした18名）について、学生自身による評価と実習先による評価の平均を比較したものである。

項目によって、学生による評価が高いものと、実習先による評価が高いものが異なっている。個別の回答（紙幅の都合で非掲載）をみると、「学生が7段階中1、実習先が7段階中7と評価する」「学生が5段階中5、実習先が5段階中1と評価する」など、大きく差がある場合もある。現時点では十分な取り組みができていないが、他者からの評価を用いることで、学修成果を学生自身がより利用しやすくなる可能性があるだろう。

自己評価を図示した上で気づいたことを述べる課題を実施したところ、自己評価が上がった項目について「企画案の議論をする際、アイデアを出し合った場面で成長できた」「自身創出力が倍増した理由は自分の案が今回のイベントに採用されたから」などの回答があった。反対に自己評価が下がった項目について「実習に行き年上の方と話す事が多く私の出来ていないところが明確になった」「コンピテンシーの統率力は、実習中に一番無かったことを実感」などの回答があった。協働性や発信性を有する取り組みの中で学生が具体的な経験にもとづいて自己理解を深めていると思われる。

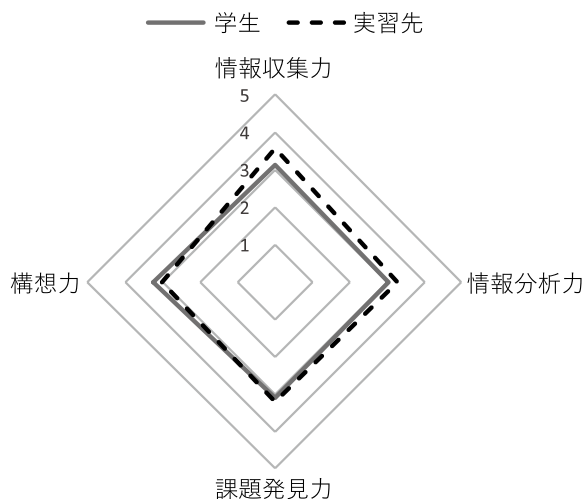


図5-1. 学生自身と実習先による評価  
(リテラシー)

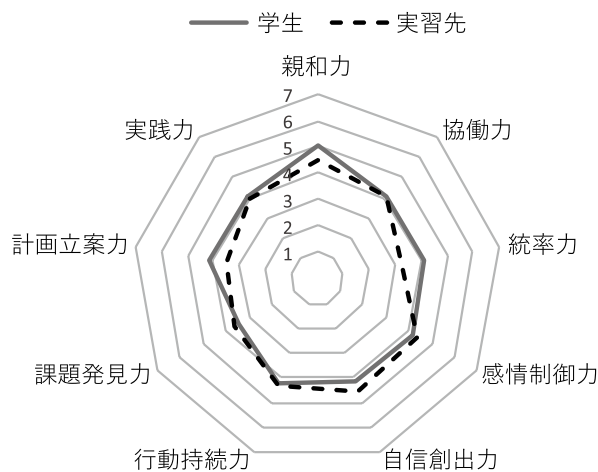


図5-2. 学生自身と実習先による評価  
(コンピテンシー)

※ PROG は、河合塾とリアセックが共同開発したジェネリックスキル（社会で求められる汎用的な能力・態度・志向）の成長を支援するアセスメントプログラムである。

## 大学版社会見学プログラム 社会の表舞台を支える裏部隊の人々

WIL推進センターでは、WILプログラムへの参加の心理的ハードルを下げるための取り組みをしている。その1つは企業見学および社会人との座談会のプログラムである。2週間ないし1か月以上にわたる単位認定型就業体験への参加の前段階として、企業や社員・職員といった存在をより身近に感じられることをねらいとして2024年度より実施している。

2023年度秋学期において、単位認定型就業体験説明会の参加者が69名であったのに対して、実習へのエントリーが22名であり、40名以上の学生が就業体験に関心をもちながらもエントリーに至らなかったことがあった。エントリーをおこなわなかった学生への調査を実施したところ、回答者は少数であったが、「思ったより内容が難しそうだった」「もっと準備してから参加したい」といった回答があった。そこで、より参加のハードルが低い1日で完結する見学みのプログラムを企画した。

2024年度には2回、2025年度には1回を実施した。参加者アンケートからは「社会に出ることや働くということに実感が持てなかったが、(中略)会社や社会の硬いイメージがなくなった(第1回)」「会社は人との距離が遠いように感じていたが、(中略)楽しそうだと感じた(第3回)」など、企業や社員・職員を身近に感じるにつながっている様子がみられる。本プログラム参加後に単位認定型就業体験への参加につながった学生について、第1回の参加後には見学で訪問した企業の実習への参加が3名あった。しかし、それ以外では単位認定型就業体験の参加につながる事例は一部にとどまっている。また、学期中の土日や長期休暇中の開催となることもあったか、参加者数は10~13名にとどまっている。一定の成果はあるが、WILプログラムによる学びを広げるためにさらなる取り組みが必要である。

表5-4. これまでの見学プログラム実施概要

回	実施日	訪問先	参加者数	うち就業体験への参加者数※
1	2024年5月18日(土)	株式会社類設計室 イオンタウン茨木太田	12名	5名
2	2024年9月26日(木)	株式会社ガンバ大阪 EXPOCITY (三井不動産商業マネジメント株式会社)	10名	1名
3	2025年9月17日(水)	JR西日本電気テック株式会社 株式会社類設計室	13名	1名

※本プログラムへの参加後に2025年度秋学期までの単位認定型就業体験に参加した人数。



チェックポイントにはWILチャレンジの採択プロジェクトの“先輩学生”や、単位認定型就業体験の参加者が待ち構えている箇所もあり、流れの中でWILに触れてもらうことを狙った。また、4月9日には、キャリア支援課など「就活の味方になる場所」を重点的に巡るなど、目的に合わせたルート設定を行った。

## ■ 実施結果と参加状況

事前申込数は延べ約300名となり、当日の参加実績も非常に盛況であった。アンケート結果は表5-5の通り。

また、2日目のアンケートでは、各プログラム内容に関して詳細な評価を得ており、いずれも高い満足度を示した(表5-6)。

### 参加学生の声(自由記述より抜粋)

「1人参加で不安だったが、多くの人と話せて安心した。同じ学部以外の人とも出会えて楽しかった」(4/8)

「就職活動の仕組みが分かり、今から何をすべきか見えた。インターンシップにも積極的に取り組みたい」(4/9)

「就職活動に対する不安が和らいだように感じた。何事にもとりあえずやってみることを大切にしてみようと思う」(4/9)

## ■ 活動への波及効果

本イベントの最大の成果は、その後の具体的なWIL活動への動線として機能した点にある。参加者の中から、以下のプログラムへの応募・参画が確認されている。

- ・単位認定型就業体験(説明会・事前講座・実習)への参加
- ・WILチャレンジ採択プロジェクトへの参加

入学直後の熱量が高い時期に、WILプログラムに参加している先輩学生の姿を実際に目にし生の声を聞いたことや、ワークを通じて能力開発の必要性を感じさせたことが、初年次からの参画率向上に寄与したと考えられる。

## ■ 今後の課題と展望

初年度として大きな成果を得た一方で、運営面での課題も明確になった。大規模イベントゆえに、「各セッションにおける行動ログの収集」が不十分であり、個々の学生の興味関心に基づいた継続的なフォローアップに課題を残した。また、アンケートからは「同じ学部の友達をもっと作りたい」といった声もあり、グループ編成の工夫が求められる。

今回得られた情報を次年度以降の企画に反映し、新入生の「最初の一步」をより確実な学びに繋げていきたい。

表5-5. 実施概要と満足度

実施日	イベント名称	参加者数	満足度 (肯定的回答の割合)
4月8日(火)	友達づくり&キャンパス探検隊	210名	99.4% ※1
4月9日(水)	サキドリ!就活セミナー&キャンパス探検隊	90名	99.1% ※2

※1 設問「今日のイベントはどれくらい楽しかったですか?」に対し「とても楽しかった」「まあ楽しかった」と回答した割合。

※2 4月9日実施の全3プログラムに対する満足度の肯定回答率。詳細は表5-6参照。

表5-6. 4月9日プログラム別詳細評価(肯定的回答率)

評価対象プログラム	肯定的回答率 (「とてもよかった」「まあよかった」の合算値)
講演「大学生活の過ごし方と就活の備え」	98.7%
ワーク1~3「会社設立・採用計画・採用選考」	100%
「キャンパス探検隊」(就活の味方になる場所を見つけよう)	98.7%

## 第6章 資料編

最後に、WILに関する学内規程や、2025年度現在の委員の構成、本年度開催した会議やイベント等の記録を資料として掲載する。



# 2025年度追大WIL事業計画

1. 大方針：センター所管副学長の意向をうけ、
  - 1.1. 既存の WIL 関連制度等の円滑な運用と、効果性を高めるための改善を行う
  - 1.2. 第Ⅳ期経営計画の CSF を念頭に、全学・機構・学部での WIL 推進を促進し、拡充を目指す

CSF No.51 「OIDAI WIL & MATCH を活用した教育支援の取組」（教務課）  
2025 年度計画  
各学部・研究科において授業内外の学生の学習を活性化し効果的に教育を行うための措置を講ずる。そのために、学生の主体的参加を促す授業形態、授業内容及び授業方法の導入をする

- 1.3. 各学部の WIL 推進センター委員との連携を深め、学部における WIL プログラム展開を促進する
  - 1.4. センター直轄の追大 WIL プログラムである「単位認定型就業体験」や、「追大 WIL チャレンジ（追大 WIL 奨励金プロジェクト）」、「追大 WIL コラボ」などの WIL 課外活動への申込数、参加学生の増加をはかる
2. 2025 年度 WIL 事業計画詳細
    - 2.1. 追大 WIL 推進環境の整備
      - センター委員会の開催 年 10 回程度
      - (必要に応じ) 規程等の改正
      - 2026 年度のセンター設立 5 周年記念事業の実施検討と予算計画策定
    - 2.2. 追大 WIL プログラム（正課科目）関連
      - 2025 年度登録科目の集約（春・秋学期）（4 月・10 月）と情報共有
      - 登録科目の広報協力意向アンケート実施
      - 「プロジェクト実践（プロジェクトタイプ）」募集（4 月・7 月・12 月）および審査（5 月・8 月・1 月）※ 12 月募集分は翌年度開始
      - 2026 年度「キャリア形成プロジェクト」募集（7 月～）
    - 2.3. 追大 WIL プログラム（課外活動）関連
      - 「追大 WIL コラボ（登録型）」情報収集、登録
      - 「追大 WIL コラボ（応募型）」募集（4 月・7 月・12 月）および審査（5 月・8 月・1 月）※ 12 月募集分は翌年度開始
      - 「追大 WIL チャレンジ」（追大 WIL プログラム奨励金プロジェクト）募集（4 月・7 月・12 月）および審査（5 月・8 月・1 月）※ 12 月募集分は翌年度開始
      - 学生支援課との連携
    - 2.4. 追大 WIL 評価検証関連
      - 一部科目におけるアセスメントの試行と分析を継続
      - 教務課が実施する各種アンケート、PROG データ等を活用した分析を試行
    - 2.5. WIL 推進センター直轄の追大 WIL プログラム関連
      - 単位認定型就業体験の実施と WIL 推進センター委員会への報告
      - WIL 推進センター担当教員が担当する各科目（キャリア形成プロジェクト等）実施
    - 2.6. 追大 WIL 広報関連
      - CSF の「学生の主体的参加を促す授業形態、授業内容及び授業方法の導入」を推進するための広報活動をおこなう
      - WIL 推進センター年報第 4 号（2025）の作成（10 月～ 3 月）
      - NEWS LETTER の発信
      - ホームページ（WIL レポート）他 更新・強化（通年）、広報課との連携
      - 学生向けの広報強化
      - 追大 WIL AWARDS の開催
    - 2.7. 新入生を対象とした WIL 周知のための入学直後イベント
      - 2025 年度の新入生を対象としたイベントの実施
      - 2026 年度の新入生を対象としたイベントの計画
    - 2.8. 追大 WIL パートナー制度の運用
      - ストラテジーパートナー制度の継続運用

以上

# 2025年度追大WIL事業報告

※□内は事業計画

## 1. 総括

大方針：センター所管副学長の意向をうけ、

- 1.1. 既存の WIL 関連制度等の円滑な運用と、効果性を高めるための改善を行う
- 1.2. 第Ⅳ期経営計画の CSF を念頭に、全学・機構・学部での WIL 推進を促進し、拡充を目指す
- 1.3. 各学部の WIL 推進センター委員との連携を深め、学部における WIL プログラム展開を促進する
- 1.4. センター直轄の追大 WIL プログラムである「単位認定型就業体験」や、「追大 WIL チャレンジ（追大 WIL 奨励金プロジェクト）」、「追大 WIL コラボ」などの WIL 課外活動への申込数、参加学生の増加をはかる

WIL 推進センター委員との連携により、WIL 推進に資する取り組みを進めてきた。正課外活動の WIL プログラムのうち応募型のものの総数が昨年比で増加したことや（5 件→7 件）、関与した学生数が今年度も大きく伸びたこと（66 名→125 名）は大きな成果である。また、複数の学部の新入生演習において WIL プログラムの説明を実施するなど、各学部との連携も深めている。

## 2. 2025 年度 WIL 事業計画詳細と結果について

### 2.1. 追大 WIL 推進環境の整備

- センター委員会の開催 年 10 回程度
- （必要に応じ）規程等の改正
- 2026 年度のセンター設立 5 周年記念事業の実施検討と予算計画策定

委員会は全 10 回の開催に加え、メール審議・報告 4 回の開催となり、計画の年 12 回という回数にほぼ相当する開催数であった。また、「追大 WIL プログラム奨励金規程」の改正手続きをおこない、WIL チャレンジの活動（採択）を複数年度にわたって行うことを可能とした。なお、センター設立 5 周年記念事業については、新規の予算化は行わなかったが、学会等との連携を含めて計画を検討中である。

### 2.2. 追大 WIL プログラム（正課科目）関連

- 2025 年度登録科目の集約（春・秋学期）（4 月・10 月）と情報共有
- 登録科目の広報協力意向アンケート実施
- 「プロジェクト実践（プロジェクトタイプ）」募集（4 月・7 月・12 月）  
および審査（5 月・8 月・1 月）※ 12 月募集分は翌年度開始
- 2026 年度「キャリア形成プロジェクト」募集（7 月～）

事業計画通りの実施。登録科目数は微増、クラス数はやや減少して、それぞれ 53 科目・365 クラスとなった。プロジェクト実践（プロジェクトタイプ）は応募 1 件、採択 1 件。理工学部が開設年度であったことから現時点での登録科目数はゼロとなっているが、WIL 推進センター委員の働きかけによって学部内の理解が進んでおり、次年度以降の登録増に期待する状況である。

### 2.3. 追大 WIL プログラム（課外活動）関連

- 「追大 WIL コラボ（登録型）」情報収集、登録
- 「追大 WIL コラボ（応募型）」募集（4 月・7 月・12 月）  
および審査（5 月・8 月・1 月）※ 12 月募集分は翌年度開始
- 「追大 WIL チャレンジ」（追大 WIL プログラム奨励金プロジェクト）募集  
（4 月・7 月・12 月）および審査（5 月・8 月・1 月）※ 12 月募集分は翌年度開始
- 学生支援課との連携

プログラムの登録や募集については事業計画通りの実施。「追大 WIL コラボ(登録型)」は3件、「追大 WIL コラボ(応募型)」は応募2件、採択2件。「追大 WIL チャレンジ」は応募5件、採択5件。追大 WIL チャレンジは2026年度4月スタート向けの募集において応募数が3件となっている。

#### 2.4. 追大 WIL 評価検証関連

- 一部科目におけるアセスメントの試行と分析を継続
- 教務課が実施する各種アンケート、PROG データ等を活用した分析を試行

プログラム終了時アンケートの試行は24年度に引き続き一部のプログラムにおいて実施しており、分析中である。PROG データについては全体傾向について公開されているため、それとの比較の形で分析を検討しているところである。

#### 2.5. WIL 推進センター直轄の追大 WIL プログラム関連

- 単位認定型就業体験の実施と WIL 推進センター委員会への報告
- WIL 推進センター担当教員が担当する各科目(キャリア形成プロジェクト等)実施

計画通りの実施。単位認定型就業体験の参加者は受け入れ事業所23社、参加学生136名。昨年度の19社94名から増加。今年度からの新規の取り組みとして、従前の「事前研修」の部分を、就業体験を含む様々な社会と関わる活動の準備講座と位置付けた「事前講座」として再編し、この受講によって「インターンシップ実習Ⅰ」の単位(1単位)を認定する仕組みを構築した。これにより就業体験参加への間口を広げる意図であったが、結果として事前講座の参加学生は193名となり、これは2024年度の事前研修参加者数である78名を大きく上回るものとなった。ただ、実際に就業体験に参加した学生はその70%となり、この参加率をいかに高めていけるかが今後への課題となった。

#### 2.6. 追大 WIL 広報関連

- CSFの「学生の主体的参加を促す授業形態、授業内容及び授業方法の導入」を推進するための広報活動をおこなう
- WIL 推進センター年報第4号(2025)の作成(10月~3月)
- NEWS LETTERの発信
- ホームページ(WILレポート)他更新・強化(通年)、広報課との連携
- 学生向けの広報強化
- 追大 WIL AWARDSの開催

新任教員向けの研修会において WIL についての説明をおこなった他、WIL 推進センター委員による学部会議での説明など、教員の認知度・理解度向上のための取り組みを実施した。また、年報作成をはじめとした例年通りの広報活動に加え、学生に向けては次項にとりあげている新入生向けのイベントにおいて WIL の説明をおこなった。

#### 2.7. 新入生を対象とした WIL 周知のための入学直後イベント

- 2025年度の新入生を対象としたイベントの実施
- 2026年度の新入生を対象としたイベントの計画

今年度の新入生を対象に、4月第2週に2回にわたってイベントを実施した。タイトルはそれぞれ、「友達作り&キャンパス探検隊」「サキドリ!就活セミナー&キャンパス探検隊」とし、友人ができるだろうか、という新入生の最も大きな不安に応えつつ、WILの紹介やWILプログラムに取り組む先輩学生との接点作りを自然な形で実現できた。参加申込者数は330名にのぼった。

#### 2.8. 追大 WIL パートナー制度の運用

- ストラテジーパートナー制度の継続運用

新たにストラテジーパートナーとして佐藤友美子先生をむかえ、6人体制となった。ストラテジーパートナーの方々の知見等の活用については昨年度につづき積み残し課題となった。

## 2025 年度 WIL 推進センター委員会

所 属	氏 名	備 考
WIL 推進センター長	大申 恵太	(1) センター長
文学部	納谷 新	(2) 各学部長が指名した教員
国際学部	澁谷 恵美	(2) 各学部長が指名した教員
心理学部	田中 秀明	(2) 各学部長が指名した教員
社会学部	古川 隆司	(2) 各学部長が指名した教員
法学部	服部 高宏	(2) 各学部長が指名した教員
経済学部	長谷川 路子	(2) 各学部長が指名した教員
経営学部	村上 喜郁	(2) 各学部長が指名した教員
地域創造学部	葉山 幹恭	(2) 各学部長が指名した教員
理工学部	駒谷 昇一	(2) 各学部長が指名した教員
教務課	上田 倫子	(4) 教務・学生支援事務部長が指名した教務課事務職員及び学生支援課事務職員
学生支援課	佐田 竜一	(4) 教務・学生支援事務部長が指名した教務課事務職員及び学生支援課事務職員
WIL 推進センター	伊藤 文男	(5) センター担当教員
WIL 推進センター	田上 正範	(5) センター担当教員
WIL 推進センター	太田 昌志	(5) センター担当教員

※備考欄の ( ) は「追手門学院大学 WIL 推進センター規程」第 8 条 2 項の号数を示す

## 年間の会議、イベント等の実施報告

○ 2025 年度 WIL 推進センター委員会

審議事項	報告事項	その他
<b>第1回 2025年4月24日</b>		
<p>○2025年度運営方針</p> <p>(1) 2025年度WIL推進センター事業計画</p> <p>(2) 2025年度追大WILプログラム概要</p> <p>(3) 2025年度プロジェクト実践 (プロジェクトタイプ) 募集 (修正案)</p>	<p>○WIL正課科目</p> <p>(1) 2025年度WIL正課科目一覧</p> <p>(2)取材に関するアンケート</p> <p>○追大WIL課外活動</p> <p>・2025年度追大WILチャレンジ 審議 (条件付き採択分)</p> <p>○WIL広報</p> <p>・WIL推進センター年報 第3号 (2024) 外部公開</p>	<p>○その他</p> <p>(1) 2025年度WIL 推進センター 委員会構成員</p> <p>(2) 2025年度WIL 推進センター委員会 開催日程 (案)</p> <p>(3) 2025年度追大WIL パートナー委嘱について</p>
<b>第2回 5月29日</b>		
<p>○WIL正課科目</p> <p>・2025年度春学期プロジェクト実践 (プロジェクトタイプ) 審議</p> <p>○追大WIL課外活動</p> <p>(1) 2025年度追大WILコラボ (応募型) 審議</p> <p>(2) 2025年度追大WILチャレンジ審議</p>	<p>○追大WIL課外活動</p> <p>(1) 2025年度春学期 (8-9月期) ステイ型就業体験 (海外版) 実施状況</p> <p>(2) 2025年度追大WILチャレンジ 進捗状況 (追大ハーベスト)</p>	
<b>第3回 6月26日</b>		
<p>○WIL正課科目</p> <p>(1) 2026年度キャリア形成プロジェクト 募集</p> <p>(2) 2025年度プロジェクト実践 (プロジェクトタイプ) 募集</p> <p>(3) 2025年度春学期プロジェクト実践 (プロジェクトタイプ) I~IV単位認定</p> <p>○追大WIL課外活動について</p> <p>(1) 2025年度追大WILコラボ (応募型) 募集</p> <p>(2) 2025年度追大WILチャレンジ募集</p> <p>(3) 2025年度追大WILチャレンジ 「テイキングヘルプデスク」</p>	<p>○WIL正課科目</p> <p>・2025年度春学期プロジェクト 実践 (実習タイプ) ・インターン シップ実習 I~IV単位認定</p> <p>○追大WIL課外活動</p> <p>(1) 2025年度追大WILコラボ (登録型) 応募</p> <p>(2) 2025年度追大WILコラボ (応募型) 4月募集の状況</p> <p>(3) 2025年度追大WILチャレンジ 4月募集の状況</p> <p>(4) 2025年度追大WILチャレンジ 「追大ハーベスト」の状況</p>	
<b>第4回 7月24日</b>		
<p>○WIL正課科目</p> <p>・ 2025年度プロジェクト実践 (プロジェク トタイプ) 採択について (7月募集分)</p> <p>○追大WIL課外活動</p> <p>(1) 2025年度追大WILコラボ (応募型) 採択について (7月募集分)</p> <p>(2) 2025年度追大WILチャレンジ採択に ついて (7月募集分)</p> <p>(3) 社会見学プログラム (社会の表舞台を 支える裏部隊) 第3弾実施について</p>	<p>○WIL正課科目</p> <p>・WIL正課科目の取材に関する アンケート実施結果</p>	<p>○追大WIL課外活動</p> <p>・2025年度追大WIL チャレンジについて (7月募集・センター 内差戻分)</p>

審議事項	報告事項	その他
<b>第5回 9月11日</b>		
	○追大WIL課外活動 (1) 2025年度追大WILコラボ (登録型) 応募について (2) 2025年度追大WILチャレンジ「追 大ハーベスト」の状況について (3) 2025年度追大WILチャレンジ 「シニア万博」の状況について	
<b>第6回 10月16日</b>		
○WIL正課科目 ・2026年度春学期プロジェクト実践 (プロジェクトタイプ) 募集 ○追大WIL課外活動 (1) 追大WILプログラム奨励金規程一部 改正(曇) (2) 2026年度追大WILコラボ(応募型) 募集 (3) 2026年度追大WILチャレンジ募集	○WIL正課科目 ・2026年度キャリア形成 プロジェクト募集状況	
<b>第7回 12月4日</b>		
○追大WIL課外活動 ・2026年度追大WILチャレンジ募集 要項の件	○WIL AWARDS ・2025年度WIL AWARDS (成果報告会) 開催日程 (2026年3月11日) の件 ○追大WILパートナー委嘱 ・2025年度追大WILストラテジー パートナー委嘱(候補者追加) の件	
<b>第8回 2026年1月29日</b>		
○追大WIL課外活動 ・2026年度追大WILチャレンジ採択に ついて(前年度12月募集分)	○WIL正課科目 (1)2026年度プロジェクト実践 (プロジェクトタイプ) 募集状況 について (2)2025年度秋学期インターン シップ実習I~IV・プロジェクト 実践(実習タイプ) I~IV単位 認定について (3)2025年度秋学期(2-3月期) ステイ型就業体験(海外版) 実施状況について ○追大WIL課外活動 ・2026年度追大WILコラボ (応募型) 募集状況について ○WIL AWARDS ・2025年度WIL AWARDS (成果報告会) について	

次ページへ続く

第9回 2026年2月12日		
○WIL正課科目 ・2026年度プロジェクト実践(プロジェクトタイプ)採択について(前年度12月募集分) ○追大WIL課外活動 (1) 2026年度追大WILチャレンジ採択について(前年度12月募集再審議分) (2) 2026年度追大WILチャレンジNEXT募集について ○WIL推進センター事業報告 ・2025年度WIL推進センター事業報告(案)について	○WIL AWARDS ・2025年度WIL AWARDS(成果報告会)について	
第10回 2026年3月19日(予定)		

○ 2025年度 WIL 推進センターにおける WIL プログラム実施関連イベント

春学期		秋学期	
4月8日	新入生向け 友だち作り&キャンパス探検隊@総持寺	10月8日、9日	ステイ型就業体験(海外版)説明会 ※追大留学フェア
4月9日	新入生向け 就活サキドリ&キャンパス探検隊@総持寺	10月2日、7日	単位認定型就業体験説明会
4月22日	ステイ型就業体験(海外版)説明会 ※追大留学フェア	10月21、28日 11月11、25日 12月2、9日	単位認定型就業体験事前講座
4月15日、17日	単位認定型就業体験説明会	12月20日	単位認定型就業体験連絡会
4月1日~5月7日	追大WILチャレンジ募集説明動画配信	12月1日~1月13日	追大WILチャレンジ募集説明動画配信
5月13、20、27日 6月3、10、17日	単位認定型就業体験事前講座		
6月中旬	追大WILコラボ運用ガイダンス	3月11日	WIL AWARDS
6月24日	単位認定型就業体験連絡会	3月19日	WIL推進センター年報発行
6月26日~7月16日	追大WILチャレンジ募集説明動画配信		(予定) 新入生向けWebサイト更新
9月17日	大学版社会見学・社会の表舞台を支える裏部隊人々		(予定) 大学Webサイト更新
9月30日	単位認定型就業体験事後研修・報告会		(予定) WILレポート更新
		3月31日	単位認定型就業体験事後研修・報告会

## ●追手門学院大学WIL推進センター規程 2021年11月19日制定

(趣旨)

第1条 この規程は、追手門学院大学学則第58条に基づき、追手門学院大学(以下「本学」という。)にWIL推進センター(以下「センター」という。)を置き、センターに関する基本的事項を定める。

(定義)

第2条 WILとは、主体的に学び、協働して問題解決にあたる学修スタイルにより、行動(Work)を通じて学修(Learning)を行い、同時にそれを即実践に反映する経験の蓄積を図ろうとするものをいう。

2 本学が実践するWILを特に追大WILといい、該当する正課科目及び正課外活動を追大WILプログラムという。

(目的)

第3条 センターは、追手門学院の教育理念である「独立自強・社会有為」な人材育成に資するために、追手門学院創立130周年に掲げた新教育コンセプトである「WIL(Work-Is-Learning)」の推進を図ることを目的とする。

(事業)

第4条 センターは、前条の目的を達成するために、次の各号の事業を行う。

- (1) 追大WILの方針及び戦略の策定に関すること。
- (2) 追大WILプログラムの登録又は認定に関すること。
- (3) 追大WILプログラムの科目修了の認定に関すること。
- (4) 追大WILプログラムの事業費補助及び奨励金に関すること。
- (5) その他センターの目的達成のために必要な事業に関すること。

(センター長)

第5条 センターに、WIL推進センター長(以下「センター長」という。)を置く。

2 センター長は、学長の推薦により常任理事会の議を経て、学長が任命する。

3 センター長は、センターを代表し、センターの業務を統括する。

4 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

5 センター長が年度の途中で任命された場合は、前項の定めにかかわらず、就任した年度の翌年度の4月1日から起算して2年を経過する日までを任期とする。

(センター担当教員)

第6条 センターの業務を円滑に運用・推進するためにセンター担当教員を置くことができる。

2 センター担当教員は、センター長が推薦し、学長が委嘱する。

(外部人材からの支援・協力)

第7条 追大WILプログラムの推進及び発展を図るため、本学への助言・指導及び運営参画など、外部人材からの支援・協力を求めることができる。

2 外部人材からの支援・協力に関わる必要な事項は、別に定める。

(追手門学院大学WIL推進センター委員会)

第8条 センターの基本方針に関わる重要事項、並びに第4条の事業に関わる事項について協議するために、WIL推進センター委員会(以下「委員会」という。)を置く。

2 委員会は、次の各号の委員をもって構成する。

- (1) センター長
- (2) 各学部長が指名した教員
- (3) その他センター長が必要と認めた者
- (4) 教務・学生支援事務部長が指名した教務課事務職員及び学生支援課事務職員
- (5) センター担当教員

3 委員会は、センター長が招集し、議長となる。

4 委員会は、必要に応じて副学長及び委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(事務の所管)

第9条 この規程に関する事務は、教務課の所管とする。

(規程の改廃)

第10条 この規程の改廃は、大学教育研究評議会の議を経て、学長が決定する。

附 則

1 この規程は、2022年4月1日から施行する。

2 この規程の制定に伴い、追手門学院大学キャリア開発センター規程(2017年1月16日制定)及び追大WIL推進に係る規程(2020年5月14日制定)は、2022年3月31日をもって廃止する。

## ●追大WILプログラム奨励金規程 2020年11月19日制定

(目的)

第1条 この規程は、追手門学院大学(以下「本学」という。)の学生が主体的に行う課外活動のうち、追大WILプログラム認定の課外活動(以下「WIL課外活動」という。)を奨励するために、経済的な支援をすることを目的とする。

(名称)

第2条 前条の奨励金を「追大WILプログラム奨励金」(以下「WIL奨励金」という。)という。

(対象)

第3条 WIL奨励金の対象となるWIL課外活動は、以下の各号の要件すべてを充足するものとする。

- (1) 5人以上の学生有志が行う活動であること。
- (2) 学生の主体的な活動を支援すると共に、奨励金管理に対する責任を有する教職員が指導者となること。
- (3) 営利を主たる目的とする活動ではないこと。
- (4) 大学公認団体が、その設立目的に従って行う主たる活動ではないこと。
- (5) 特定ゼミや演習などの学修や研究を目的とした活動ではないこと。
- (6) 活動期間が複数年度にわたらないこと。

2 前項の要件を充足しない場合であっても、給付する価値が高いと判断した活動は、審査の上対象と認めることができる。

(申請手続き)

第4条 WIL奨励金の受給を希望する学生は、別に定める募集要領に基づき、所定の期日までにプロジェクト内容を記した申請書類を、教務課へ提出しなければならない。

(審査)

第5条 WIL奨励金の対象となるWIL課外活動及び給付額の審査は、追手門学院大学WIL推進センター委員会(以下「センター委員会」という。)が行う。

2 センター委員会は、必要に応じて申請学生及び指導教職員にヒアリングを行うことができる。

(報告)

第6条 センター委員会は、審査結果を大学教育研究評議会に報告しなければならない。

(給付)

第7条 WIL奨励金は、原則として事後清算とし、当該年度の所定の期限までに所定の手続きにより給付するものとする。ただし、当該指導教職員の責任の下、請求書に基づいて事前に給付することができる。

2 WIL奨励金は申請目的以外に使ってはならない。ただし、やむを得ない場合には、事前相談のうえ、所定の手続きを経てセンター委員会の許可を得るものとする。

3 WIL奨励金以外に地方公共団体等の補助金等がある場合は、趣旨が重複する予算項目については、当該申請額を給付対象より除外するものとする。

4 給付決定後、申請計画の変更又は中断の必要性が生じた場合は、センター委員会において再審査の上、計画変更又は中断及び中断までにかかった活動費の給付を認めることができる。

(執行)

第8条 WIL奨励金の執行については、学校法人追手門学院の定める学内規定に従うものとする。

(活動報告発表)

第9条 WIL奨励金の給付対象に認められたWIL課外活動を申請した学生は、大学の指定した方法により、その活動内容等を発表しなければならない。

(活動の終了又は中断)

第10条 WIL奨励金の給付対象となるWIL課外活動が終了又は中断した場合は、申請学生は、以下の各号に定める報告書を作成し、当該指導教職員を経由して、所定の期日までに教務課に提出しなければならない。

- (1) 活動報告書
- (2) 証憑類を添付した決算報告書

(活動の中止)

第11条 WIL課外活動において、不正な活動が認められた場合は、当該指導教職員は直ちにセンター委員会に届け出るものとする。

2 WIL課外活動において、不正な活動が認められた場合は、センター委員会が審議の上、活動を中止させることができる。また、奨励金の給付が不相当と認められる場合には、センター委員会が審議の上、奨励金の全額又は一部の返還を遡って求めることができる。

(事務所管)

第12条 WIL奨励金に関する事務は、教務課が行う。

(規程の改廃)

第13条 この規程の改廃は、常任理事会が行う。

附 則

この規程は、2020年11月19日から施行する。

附 則

この規程は、2022年4月1日から施行する。

●追大WILパートナーに係る規程 2020年11月19日制定

(目的)

第1条 この規程は、追大WILプログラム(以下「追大WIL」という。)の推進及び発展を図るため、本学への助言・指導及び運営参画など、外部人材からの支援・協力の運用について定めることを目的とする。

(活動内容)

第2条 前条に定める外部人材を、追大WILパートナー(以下「WILパートナー」という。)という。

2 WILパートナーの具体的な活動内容については次の各号に掲げるものとする。

- (1) 追大WILに関する事業計画策定への助言
- (2) 追大WILに関する事業実施報告への助言
- (3) 追大WILの協働開発
- (4) 追大WILに関する成果発表等への参加及び講評
- (5) 追大WILに関する広報活動への協力
- (6) その他追大WILの推進及び発展に関すること。

(資格)

第3条 WILパートナーは次の各号いずれかに該当する者とする。

- (1) 高等教育に関する有識者
- (2) 追手門学院大学WIL推進センター委員会(以下「センター委員会」という。)が指名する本学外部のステークホルダー
- (3) 人材開発に関する実務経験者
- (4) 一般企業等における人事・採用等の経験者
- (5) 一般企業等においてインターンシップなどの産学連携事業の担当責任者
- (6) その他特に本学の教育に理解を持って支援する意志のある者

(WILパートナーの種類と役割)

第4条 WILパートナーは役割に応じ、次の各号に掲げる3種類とする。

- (1) ストラテジーパートナー  
追大WILの事業計画策定及びその評価検証に対する助言を行うことを主な役割とし、第2条第2項第1号から第5号までの活動に関与する者
- (2) プロジェクトパートナー  
追大WILを協働開発し、又は参画することを主な役割とし、第2条第2項第3号から第5号までの活動に関与する者
- (3) サポートパートナー  
追大WILの講評・評価することを主な役割とし、第2条第2項第4号及び第2条第2項第5号の活動に関与する者

2 各種WILパートナーの人数については、役割に応じ設定する。

(WILパートナーの決定)

第5条 WILパートナーは、センター委員会が推薦し、大学教育研究評議会の議を経て、学長が決定する。

(任期)

第6条 WILパートナーの委嘱期間は、原則として毎年4月から翌年3月末までの原則1年間単位とし、再任は妨げないものとする。

2 前項の規定にかかわらず、その言動等がWILパートナーに相応しくないと認められた場合は、年度の途中においても、センター委員会の審議を経て、学長が委嘱を中止することができる。

(謝金)

第7条 WILパートナーへの謝金については、学校法人追手門学院謝金等支給基準に基づき支給する。

(事務所管)

第8条 WILパートナーに関する事務は、教務課が行う。

(規程の改廃)

第9条 この規程の改廃は、大学教育研究評議会の議を経て、学長が決定する。

附 則

この規程は、2020年11月19日から施行する。

附 則

この規程は、2022年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、2024年4月1日から施行する。

●追大WIL推進に係る内規 2020年6月11日制定

(目的)

第1条 この内規は、追大WILを推進するために必要な事項を定めることを目的とする。

(登録又は認定基準)

第2条 追大WILプログラムとして登録する正課科目は、次の各号に掲げる要素を全て満たすものとする。

- (1) 取り組むテーマが社会有為であること
- (2) 協働する学修のプロセスを経て、切磋琢磨する機会があること
- (3) 成果を対外的に発信する機会があること

2 追大WILプログラムとして認定する正課外活動は、次の各号に掲げる要素及び条件を全て満たすものとする。

- (1) 取り組むテーマが社会有為であること
- (2) 協働する学修のプロセスを経て、切磋琢磨する機会があること
- (3) 成果を対外的に発信する機会があること
- (4) 活動時間が原則30時間以上確保されること
- (5) 活動日誌及び報告書等、ポートフォリオへの記録があること
- (6) 教育職員又は事務職員による指導があること
- (7) アンケートやアセスメント等による評価が行われること

(正課科目)

第3条 追大WILプログラムの正課科目は、次の各号の種別とする。

- (1) 学部・共通教育機構開講科目  
各学部又は共通教育機構があらかじめ開講する正課科目のうち、担当教育職員本人の申請に基づき、前条第1項の要素を全て満たす正課科目について、各学部長又は共通教育機構を統括する副学長の判断により、追大WILプログラムとして登録することができる。ただし、共通教育機構が開講するキャリア形成プロジェクト及びプロジェクト実践を除く。

- (2) キャリア形成プロジェクト  
各学部又は共通教育機構の全ての教育職員の申請に基づき、学期期間中に所定の回数及び曜日時限を設定し授業として行うもので、前条第1項の要素を全て満たすプロジェクトについては、共通教育機構を統括する副学長の判断により、追大WILプログラムとして登録することができる。ただし、申請する場合は、所属する各学部長の承認を得た上で行うこととする。

- (3) プロジェクト実践  
各学部又は共通教育機構の全ての教育職員の申請に基づき、学期期間中に所定の回数及び曜日時限を設定せずに活動するもので、前条第2項の要素及び条件を全て満たすプロジェクトについては、追手門学院大学WIL推進センター委員会(以下、「センター委員会」という。))での審議のうえ、共通教育機構を統括する副学長の判断により、追大WILプログラムとして認定することができる。科目修了の認定は、活動終了後、翌学期に開催するセンター委員会の審議を経て行う。成績評価が「認定」として単位付与される科目として扱う。

(正課外活動)

第4条 正課外活動において、第2条第2項に掲げる要素及び条件を全て満たす活動について、教育職員又は事務職員の申請に基づき、センター委員会の審議を経て承認されたものを、追大WILプログラム認定正課外活動(以下、「追大WIL正課外活動」という。)とすることができる。

(正課科目に係る経費)

第5条 第3条の学部・共通教育機構開講科目及びキャリア形成プロジェクトに係る経費は、特段の定めがある場合を除き、所属する各学部・共通教育機構の予算から執行する。

2 第3条のプロジェクト実践に係る経費は、センター委員会での審議を経て、全部又は一部を追大WIL推進に係る予算から執行することができる。ただし、特定の学部及び学生団体等を対象とした活動は、原則として対象から除くものとする。

(事業費補助)

第6条 追大WIL正課外活動にかかる事業費補助及び奨励金の給付は、別に定める募集要領及び規定を基に、センター委員会の審議を経て行う。ただし、特定の学部及び学生団体等を対象とした活動は、原則として対象から除くものとする。

2 事業費補助及び奨励金の給付は、本学が定めた当該年度の予算内で行う。

3 給付対象の予算項目及び執行については、学校法人追手門学院の定める経理規程及び関連規程に従うものとする。

4 事業費補助及び奨励金の給付については、事務手続きは、別に定める。

5 第4条に該当しない活動の場合においても、センター委員会の審議を経て、追大WILプログラムとして推進を補助及び給付する価値が高いと判断した活動は、対象とする場合がある。

(事業報告)

第7条 第3条のプロジェクト実践及び追大WIL正課外活動が終了又は中断した場合は、当該プログラムの代表学生が事業報告書を作成し、当該指導教育職員及び事務職員を経由して、所定の期日までに教務課に提出しなければならない。

(事務所管)

第8条 この内規に関する事務は、教務課が行う。

(内規の改廃)

第9条 この内規の改廃は、大学教育研究評議会の議を経て、学長が決定する。

附 則

この内規は、2020年6月11日から施行する。

附 則

この内規は、2020年10月1日から施行する。

附 則

この内規は、2022年4月1日から施行する。

## 編集後記

共通教育機構特任准教授 WIL推進センター長 大串 恵太

本年報では、2025年度におけるWIL推進センターの取り組みを記録した。制度としてのWILはなお発展途上ではあるが、正課・課外の双方で取り組みは着実に広がり、学生が主体的に社会と関わりながら学ぶ機会も増えてきている。とりわけ「追大WILチャレンジ」をはじめとする課外活動への参加学生は年々増加しており、そうした積み重ねが本学の「空気」をより前向きで挑戦的なものへと変えていく兆しを感じる一年でもあった。また、今年度理工学部が開設されたことで、本学の学生が挑戦できる領域はさらに広がった。文理を越えたWILの実践が数多く生まれるよう、制度面も含めた工夫を進めていきたい。

本年度をもって伊藤文男教授が退職される。伊藤先生は2019年の着任以来、WILの制度設計と基盤づくりに中心的な役割を果たされ、WIL推進センター設立後も実務面を含め多大なご尽力をいただいた。WILを形にしていく過程を共に歩むことができたことに、心より感謝申し上げるとともに、今後のさらなるご活躍を祈念申し上げたい。

共通教育機構教授 教務部長 WIL推進センターコーディネーター 伊藤 文男

WIL (Work-Is-Learning) という新教育コンセプトが発表されたのは、2018年の本学院創立130周年記念式典の場であった。「行動して学び、学びながら行動する」というフレーズに新教育コンセプトの本質が表現されている。小職は、2019年4月本学に基盤教育機構教授、就職・キャリア支援部長、キャリア開発センター長として着任したが、まず取り組んだのは、WIL構想メンバーの一人である大串センター長とのWILの制度設計であった。新教育コンセプトのイメージはある。そのイメージを具現化するために、WILの定義、WILの要件(3要素4条件)、規程制定、正課・正課外活動におけるWILの展開方策、アセスメント、予算及び執行手続きなど、詳細な設計を行った。2019年度末に正課科目の認定方針が、次いで2020年度末に課外活動の募集方針・要件が決定した。制度が固まり本稼働までに、2か年を要したことになる。2025年度のWIL AWARDSには、1正課科目と正課外の9プログラムがエントリーされ、初めて書類審査による予選会を開催し、本選で5チームが発表をした。追手門学院大学を2026年3月末で去る今、制度設計からの7年間で、ようやく一定の評価が得られる水準に達成したものと考えたい。

共通教育機構大学常勤講師 WIL推進センターコーディネーター 太田 昌志

正課科目、課外活動の事例紹介および第5章の編集を主に担当した。記事内で十分に紹介できていないものも多いが、それぞれの事例には教職員が学生の取り組みを引き出すためのさまざまな工夫がある。教職員のねらいを越えて学生が主体的に取り組んだ活動もあった。学内外に共有し、次の学びや教育実践につなげることを進めていきたい。

共通教育機構特任准教授 WIL推進センターコーディネーター 田上 正範

運営の細部というよりは、一步引いた視点から客観性を意識して携わった。学内外からWILがどう映るのか、第三者的な意見から、活動の価値を浮き彫りにする一助となれば幸いである。今後もWILの認知を広めるとともに、そこでの経験が持つ深い意味を、学生や社会に伝えていきたいと考えている。

## **追手門学院大学 WIL推進センター年報 第4号(2025)**

発行：2026年3月19日

発行者：追手門学院大学 WIL推進センター

編集：追手門学院大学 WIL推進センター

大串恵太 伊藤文男 太田昌志 田上正範  
追手門学院大学 教務課

住所：〒567-8620 大阪府茨木市太田東芝町1番1号

e-mail：ccd@otemon.ac.jp

印刷：タカラサプライコミュニケーションズ株式会社

